昭和46年11月7日発行通巻35号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

11/7
220円
35

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第35号

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2−3　〒100 TEL 03−212−0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3−3　〒530 TEL 06−231−0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1−12−1　〒802 TEL 093−53−1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1−3−3　〒460 TEL052−231−8131

次号予告

11月3日発売



世界動物百科
36号　11／14

むきだした鋭いきば。そこにしたたる赤い血。そのイメージは，そのままオオカミのものだ。しかし，かれらの生活のなかにも，人間の想像とはほど遠いロマンが，ひっそりと息づいている。

Hugo & Jane van Lawick-Goodall

平原の放浪者〝リカオン〟下

私たちの仲間

35号……11月7日

抄訳　藤原英司

獲物を追う集団行動

ある夕方のこと，ちょうど日が沈んだころ，リーダーのジェンギズが，立ちあがった。そして伸びをしながら，あくびをした。それからハバックとスイフト，バスカビルが，いっしょに寝そべっているところへ出かけていった。すると寝ていた３頭はとび起きた。そしてジェンギズを交えて，４頭はたがいに鼻をくっつけあい，くちびるをなめあって挨拶しはじめた。４頭とも尾はたかだかとあげて振り動かし，きいきいという声を出していた。やがて，その声はしだいに激しい興奮を示し，いらだった鳴き声に変わりだした。

すぐにほかの仲間も集まってきた。そしてたがいに挨拶をかわしながら，みんなが輪を描いて，ぐるぐる回り始めた。入り乱れる足並みの間から，ハバックとスイフトが，大きく口をあけたまま，口をふれあわせているのが見えた。やがて，熱狂的なぐるぐる回りは，始まったときと同じように，突然，やんだ。そして群れのリカオンたちは，次々と夕方の狩りに繰りだしていった。

８キロほど進んだところで，夕暮れの平原に，グラントガゼルが３頭現われた。リカオンたちは，すぐにそのうちの１頭を追跡しはじめた。はじめは，例によってジェンギズが先頭だった。しかしすぐに，スイフトとハバック，バスカビルの３頭が，リーダーを追い抜いた。

それから５キロ半ぐらいの間，わたしの車の速度計は，時速48キロ（30マイル）の線をさしつづけた。ときどき，群れのなかの１頭が，ごく短い間スピードをあげることがあった。しかし，とにかく全体を通じて，みんな一定の速度で追っていった。

やがてガゼルは，急に輪を描くような形で進路を大きく曲げた。するとバスカビルが，すばやくコースを曲げ，近距離を通って，一気に獲物に迫った。800メートルも追うと，バスカビルとスイフトは，獲物まで，あと数メートルの距離に肉迫した。ところがそのとき，リカオンたちは，急に追跡をあきらめることにしたようだった。１頭，また１頭と走るのをやめ，追跡のためばらばらになっていた群れは，やがてひとつにまとまった。一方，ガゼルは走りつづけ，やがて夕やみのなかに姿を消してしまった。

このときの追跡は，わたしが今までに観察したうちでは，もっとも長距離のものだった。リカオンは通常，獲物の追跡を始めたら，相手が倒れるまで追いつめて捕えると，一般に信じられている。しかし，これはもちろん正しくない。いまここに述べたのがいい例であるが，ふつうは４キロから５キロ追跡して，だめだとその獲物をあきらめ，しばらく休んでから別の獲物を追う。

長年わたしは，リカオンの狩りを何回となく観察してきた。その結果，91回の追跡のうち，獲物を狩り倒したのは39回という結果を得た。

リカオンは獲物の群れに近づくと，追跡に移るまえに，どの獲物を追いかけるか，決めているように思われることがある。だが，大きな群れを追うときは，まずその群れをごく短い距離追ってから，並み足にもどって，じっと群れのようすを見つめる。そしてまもなく，群れのなかの１頭を選んで追跡に移るか，または，他の群れに前と同じやり方を繰り返して，ようすを見る。

また，群れの追跡に当たって，リカオンの群れがいくつかに分かれることがある。それぞれ，違う獲物を追っていくのである。そして，２か所で獲物を倒すこともある。これは，相手が子どもであった場合によく起こる。だが，たいていは分散して追跡に移っても，最後には１つの相手に集中する。これはおのおののリカオンが，分散して獲物を追いながらも，つねに成功の可能性に気を配り，成功率の高そうな追跡に，順次合流していくためである。

獲物を追跡するとき，後ろにつき従うリカオンは，獲物が進路を変えたとき，すぐに最短距離をとって，獲物に追いすがる。そのため，あとについていたリカオンが，急に先頭に立つことがある。これは，獲物がトムソンガゼルである場合によく起こる。このガゼルは追われると，じぐざぐに逃げるか，大きな円を描



リカオンは〝おとな〟になっても遊び好きで，おたがいの首すじを噛みあったりして戯れる

く形で逃げる。したがって，相手がコースを変えるたびに，後ろのリカオンは次次，最短距離を突っ切って，先頭に立つことになる。

このことから，世間では誤った考えができあがった。つまり，リカオンは先頭のものが疲れると，あとのものが順次交代して，追跡を続けるというのである。だが，先頭を走るリカオンは，つねに一定のスピードを維持している。つまり，後ろを走るものよりは速い。そして，後ろのリカオンが近距離をとって先頭に立った場合でも，リーダーはスピードをあげて追いつき，もう一度先頭に立つことがよくある。一方，群れのなかには，みんなから遅れて走るものがある。たとえば，イェロー・ベリルがそうだった。このリカオンは，よくみんなから400～500メートル遅れてついていくことがあった。だが，それはただ遅れているだけで，イェロー・ベリルが奮起して先頭に出ていくところなど，一度も見たことがなかった。

ひんぴんと続く巣の引っ越し

リカオンの子どもたちが，生後約6週間になったとき，かれらはおとなたちとともに，新しい巣穴へ引っ越した。新しい穴は，もとの場所から40メートルほど離れたところだった。この移動が，どういうわけで起こったのかはわからなかった。ただ，突然リカオンの群れに混乱が起こり，みんながきいきい鳴きながら，おたがいに挨拶をしはじめた。そのうちに，子どもを含めた群れ全体が，新しい場所へ移動したのである。

どうやらリカオンには〝ついておいで〟という意味の呼び声があるようだ——むろんこれはまだ，ありそうだという推測であって，実際にそういう意味をもった声があるかどうかは，かれらの鳴き声を録音して，分析してみなくては，なんともいえないことである。だが，いずれにせよ，子どもたちはこのとき，はじめておとなのあとをついて，別の場所へ移ったのだった。

そしてこれが，その後に続く何回ともしれない引っ越しのきっかけとなった。引っ越す距離は，毎回せいぜい200～300メートルどまりだったが，どの巣にも2,3日しかいなかった。次々と引っ越していくのである。それはまるで，平原を放浪するリカオンが，その放浪の旅にそなえて，子どもたちの足ならしをしているように思われた。

リカオンが，このように巣穴をひんぴんと移すのは，ライオンを避けるためという場合がある。リカオンはライオンが近くにいるときは，ひどくおちつきがなくなる。一度ラガジャ湖のそばで，リーダーがしばらくの間，荒々しい声をあげつづけたことがあった。そしてほかのリカオンたちも，リーダーと同じほうを見つめていた。それは湖の反対側の，800メートルも離れたところにいる2頭のライオンを見て，うなっていたのだった。また，雌のリカオン2頭が，丈(たけ)の高い草のなかにあと足だけで立ち，ぴょんぴょんはねあがっていたことがあった。なにをしているのかと思ったら，草のむこうにいるライオンのことを，気にしていたのだった。



交尾期には，雌はあちこちに尿をし，雄は同時に同じ場所へ尿をかけるためにさか立ちまでする
このアクロバットは，他の雄へのにおいによる示威行為だが，まるでサーカスを見るようである。

やがて，ジューノーの子が生後約2か月になると，リカオンの群れは，子どもたちとともに，その地域を引きはらった。

シマウマの母子を襲って

リカオンの群れが狩り倒す大型の獲物としては，イボイノシシ，グラントガゼル，トムソンガゼル，ヌー，シマウマがある。ここにあげた動物は，すべてリカオンが実際に殺して食べるところを，わたしが目撃したものばかりである。

最近まで，リカオンはシマウマを倒せないと思われていた。その理由は3つある。第1はシマウマが，リカオンにとって体重のある強い動物だということ。第2は雄のシマウマが，自分の群れを守るために戦うこと。第3にシマウマは，リカオンがごく近くへいくまで走ろうとしないことで，シマウマがそのようになかなか逃げないのは，リカオンのことをなんとも思っていないのだ，と考えられたことである。

だが，わたしたちは，リカオンの群れがシマウマを追跡して，倒すところを目撃した。その攻撃のもようは，写真で記録したから，よくわかると思う。

一方，先に書いたシマウマの3つの特性というのは，決して誤りではない。わたしたちが経験したその実例を，ここにあげておこう。

ジェンギズに率いられたリカオンの一隊は，ある日，20頭ほどから成るシマウマの群れを見つけた。そのなかには，まだ小さい子ウマが1頭まじっていた。

リカオンの群れは，忍び足の歩き方に変わったが，シマウマのほうへ近づくにつれて，しだいに速度を落とした。これは，自分たちが，シマウマを狩る気がないように見せかけるためと思われた。

こうしてリカオンたちは，シマウマから20メートル以内ぐらいまでに接近した。それまでシマウマは立ったまま，リカオンの動きをながめていた。だが，あまり相手が近づきすぎたためか，シマウマたちは馬首をめぐらせて，とことこ走りだした。とたんに，リカオンの群れは追跡に移った。シマウマが動きだしたのが，攻撃の合図だったのだ。

シマウマの群れは，きっちりと押しかたまって，平原を疾駆(しっく)しはじめた。途中で，いくつもの小さな群れが合流し，群れはたちまち50頭を越える数にふくれあがった。しかし，かれらは全速力で走らなかった。群れのなかでいちばん足のおそいもの——つまり，子ウマの速度に合わせて走っているようだった。

リカオンのほうは，ジェンギズが先頭を走り，スイフトとバスカビルがすぐあとから追っていく。突然，年とった雌ウマが速度を変え，群れの最後尾を走っていた雌ウマと子どものそばに寄りそった。そのとき，ほかの雌ウマが体をめぐらすと，耳を伏せ，歯をむいて，リカオンに突っかかった。

ジェンギズはその反撃をすばやくかわし，かわってスイフトが先頭に立った。スイフトはたちまち雌ウマに追いすがった。すると，さっきの雌ウマがまた反撃に出た。こんなことが何度も繰り返され，そのたびに先頭のリカオンは相手の攻撃をかわして，後続のものが位置をかわった。

激しいもみあいのすえ，やがて雌ウマと子ウマ，それに1年早く生まれた子と思われる1歳馬が，群れから引き離された。リカオンの群れは，たちまちその3頭を包囲した。ほかのシマウマたちは，ややせりあがった大地の高みを乗り越えて，すぐに姿が見えなくなってしまった。

あとに残された雌ウマは立ちどまり，子ウマと1歳馬は母親のそばに寄りそっていた。スイフトとバスカビルが，他の2頭のリカオンとともに，シマウマのほうへ進みでた。母ウマはスイフトのほうへ踏みだして，噛(か)もうとした。すると，そのすきに，3頭のリカオンが子ウマに迫った。ところが，これは1歳馬に撃退された。

リカオンたちは，何回も子ウマに噛みつこうとしたが，そのたびに，母ウマと1歳馬の反撃を受けた。子ウマは母親のわきに，ぴったりからだをつけている。

時間がたつにつれて，リカオンたちはますます大胆になった。たがいに励ましあうよう鳴きかわしながら，あらゆる方角から獲物に迫った。にわかにスイフトが，雌ウマの口もとをねらってはねあがった。相手の上くちびるに，噛みつこうというのだ。これはリカオンがよく使う手である。獲物の上くちびるに噛みついて，相手の動きを鈍くし，その間に他の連中が，わき腹を食い破るのである。だが，今，雌ウマが頭を高く振りあげたため，スイフトはむなしく空を噛んだ。だが，スイフトはたてつづけに何度もはねあがった。

そのとき，突然，わたしは大地が小刻みに揺れ動くのを感じた。まわりを見回すと，驚いたことに，かなたから10頭のシマウマが，猛スピードで駆けてくるのが目にはいった。シマウマの群れは，すぐさま雌ウマや子ウマのところへ駆けつけると，あっというまに3頭の仲間を包みこんだ。そして，そのままきびすをかえし，たちまちその場から駆け去っていったのだった。■

Innocent Killers
by H. & J. van Lawick-Goodall.

リカオン
シマウマを攻撃する

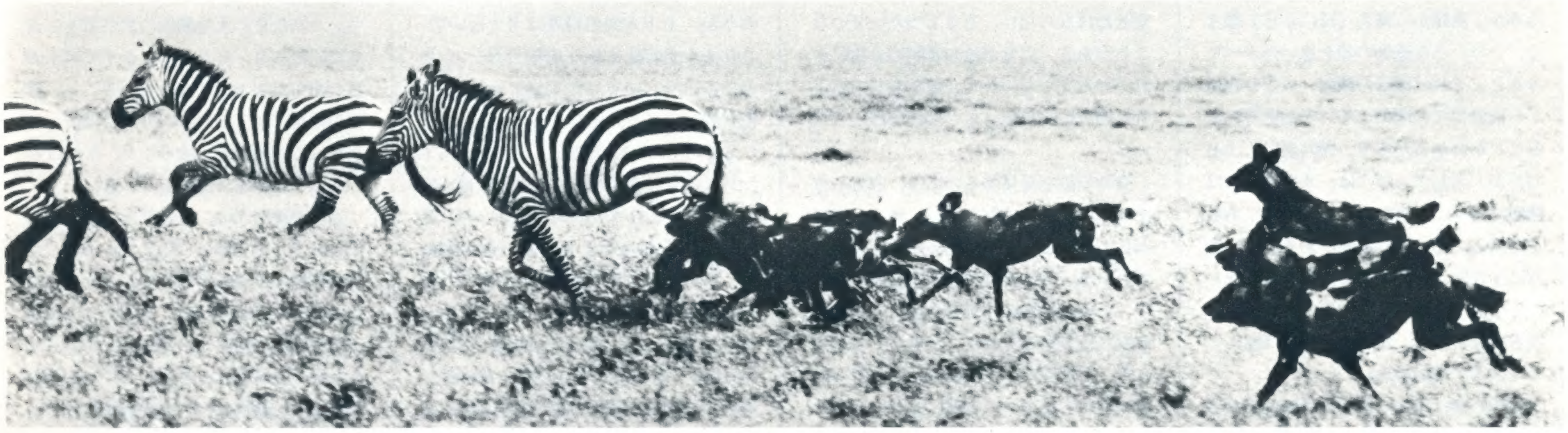
最近まで
リカオンはシマウマのような
大型獣を襲うことはない
といわれていた
しかし、この3枚の写真のように
シマウマにも果敢な攻撃を加える

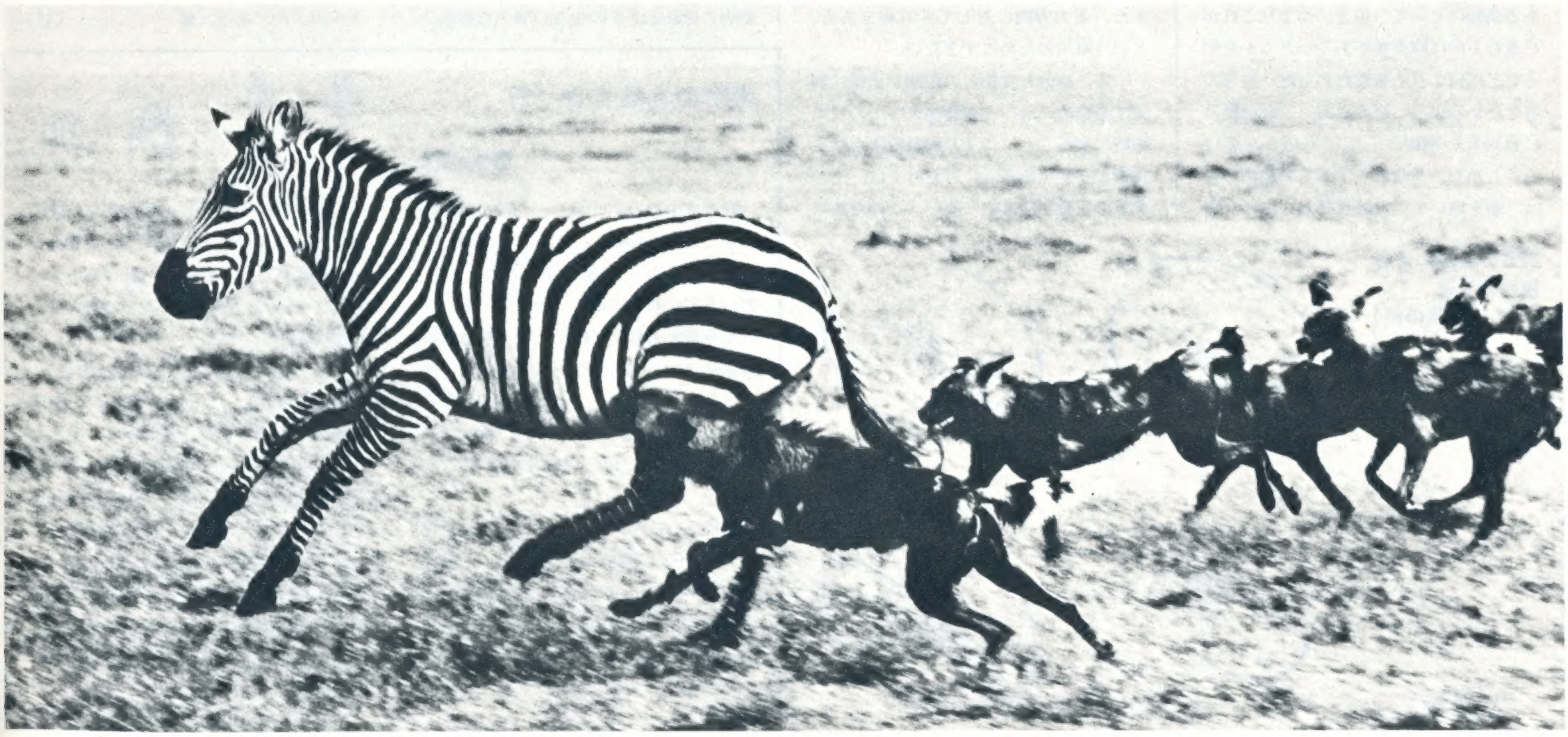
リカオンは忍び足で近づく
20メートル以内に接近
シマウマは馬首をめぐらせて走る
それが攻撃の合図だ
リカオンの群れは追撃に移る

最短距離を走り
シマウマの反撃をかわし
そのたびに先頭が交代する

獲物を群れから離すのに成功
たがいに励ますように鳴きかわし
リカオンは一団になって
獲物のシマウマに迫る







もうひとつの世界

23

グループ・5プラスⅠ

目の位置の意味するもの



キリン



アライグマ

後ろに目がないから……というのは，わたしたちがよくいうことである。確かにわたしたちの目は，顔というよりは頭部の前面に２つ並んでついている。これでは後ろが見えないのは当然である。しかし，すべての動物の目がわたしたちのように，頭部の前面に並んでついているわけではない。今回は，動物の目の位置を問題にしてみよう。ただし，話がめんどうになるので，わたしたちと同じような目をもつ動物――脊椎（せきつい）動物――に話を限ることにする。

動物の目は，実際どこについているだろうか。魚類から哺乳（ほにゅう）類まで，いろいろな動物の顔を思い浮かべてみると，それは頭部の側面，つまり真横から前面までの間のいろいろな位置にあることがわかるだろう。頭の形にもよるのだが，おおざっぱには，下等なものは側面にあり，高等なものは斜め前にあるといえる。まったく前面にあるものは意外に少ない。ヒト，サル，フクロウなどごく少数である。動物の目はなぜ頭部の後ろにないのか。なぜその位置は種によってさまざまなのか。

動物の目はすべてからだの前のほうにあるといえる。それは，「動くもの」である動物にとって，前方，つまりこれから進む方向に障害物があるかどうかを知ることが何よりも重要だからだ，と考えるとわかるように思われる。これは後ろに目がない理由としては一応うなずける。しかし，それならすべての動物の目は，前を向いていなければならない。実はこれは，動物をたんなる「動くもの」にすぎないと考えるときの解釈である。

動物はいったい何のために動くのか？それは食物をとるためである。動物とは他の生物を食物とする生物であり，植物のように無生物を栄養源とする生物ではない。だから動くのである。動く以上は障害物をよけねばならないが，それを知るのが目の本来の目的ではない。動物は何よりもまず食物を発見しなければならない。次にその食物を捕えたり，口に入れたりしなければならない。そのためには，自分の口と食物との距離を正確に判定せねばならない。もう１つたいせつなことがある。自分が他の動物の食物にされてはたまらないから，敵を発見するように四方に目を配っていなければならない。

食物や敵を発見するのには，四方八方を見ていなければならない。つまり視野が広いほどよい。そのためにはどうすればいいか。２つの目を頭の両側に置いて，片目で左側を片目で右側を，それぞれ見れば見落としがないだろう。原理的には，からだの上下か前後に１つずつの目があってもよい。実際に左右にあるのは，からだが進行方向のまわりに対称であり，重力方向に対して非対称である，という原則のためにすぎない。

一方，自分と食物との距離を正確に判定するためには，その食物を２つの目で同時に見ること，つまり両眼視または立体視が必要である。片目だけでは，その判定の正確さは非常に悪い。このためには，２つの目は同方向を向いていることが望ましい。障害物をよける必要も考慮すると，それは前向きでなければならないのである。

動物の目は，この２つの必要性，つまり広く見渡すために側面にあることと，距離判定のために前面にあることとのあいだにはさまれている。そして，実際の解決は，その動物の生活様式にとって，どちらの必要性のほうがより重要かによって定められることとならざるをえない。

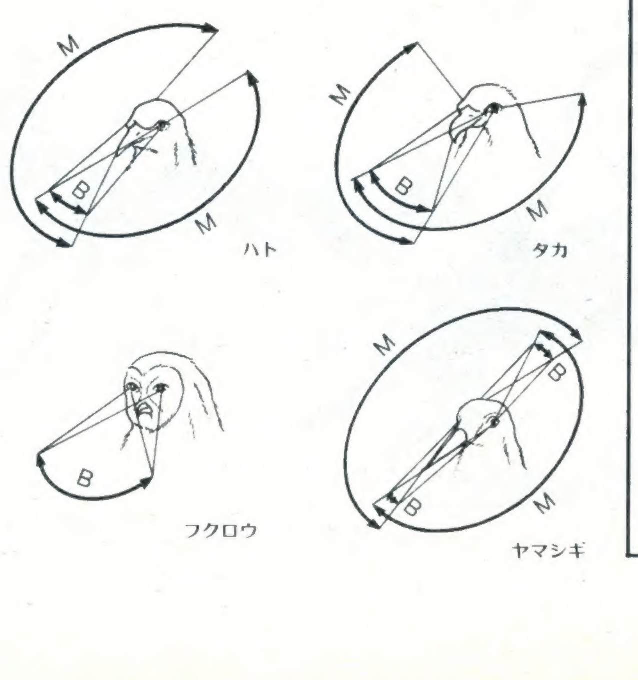
動物の視野は実際にどうなっているだろうか。上下方向の視野は考えないで，とりあえず前後左右の方向だけについてみてみよう。いくつかの鳥について，模式的に示したのが左下の図である。

ここでもう１つ必要なことがある。ヤマシギやふつうのけもののように地上性の動物は，これまでの原理でよいが，サルやふつうの鳥のように樹上性の動物は，枝から枝への距離判定が正確でなければ生活していけない。そのことを加えて考えれば，樹上性または肉食，昆虫（の成虫）食またはその両方の動物と，地上性で植物や動きの鈍い動物を食べる動物，それに敵を恐れねばならない弱い動物と恐れる必要の少ない強力な動物では，図のように視野の広さと立体視野の広さ――つまり両眼の位置――が異なることは容易に理解できるであろう。

しかし，話はこれで終わるのではない。視野の広さは頭をどのくらい動かせるかとも関係がある。実際，フクロウ類は鳥のなかでもっとも全視野が狭く，立体視野が広いのだが，かれらはからだを動かさずに，頭だけを左右にそれぞれ180度以上回転できるという，動物界においてまったく珍しい能力をもっている。さらに，目の位置は視野の広さと距離感だけの問題ではない。カエル，ワニ，カバなどの水生動物の目が頭上に並んでいること，ヒラメ，カレイやエイの目がからだの上面に並んでいること，食物の種類によってけもののあごの形，したがって頭の形が，違うこと，そのほかいろいろな問題が関係している。

動物の顔つきは，目の位置によってしばしばまったく違って見える。そのことが分類学の１つの手がかりにされさえするのだが，実はそれは，このように動物の生活と深く結びついている。わたしたちが目つきが悪いなどといっている動物の特徴は，動物にとって無意味なのではない。逆に，意味があるからこそ，目つきが違うのである。■　（U）

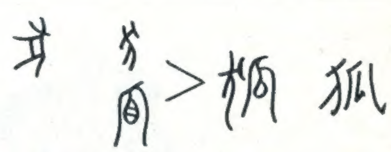
両眼の位置による視野の相違（鳥の例）



Mは片眼の視野
Bは両眼で見える範囲

漢字のふるさと　27

藤堂明保



狐（きつね）　「犬」＋「瓜」からなる字である。「瓜」とは，ツルのついた丸いウリを描いた象形文字だが，「狐」という字においては，kua とか hua という発音を表わすだけで，ウリとは何の関係もない。「狐」というのは，キツネが「クワー，クワー」と鳴くその声を表わそうとした擬声語である。漢代には hua，唐代には huo，今の北京語では hu という。

「狐狸」（キツネやムジナ）とあわせ称して，ずるい動物を代表する。「狐狸精」といえば，人をたぶらかす妖精のような女という意味である。ただ唐代の小説『任氏伝』に出てくるような女狐なら，私もだまされてみたい気がする。

長安の町はずれを，試験に落ちた貧乏書生が歩いていると，任氏という美女が一軒の家に招き入れた。一夜をあかして別れて見ると，泊った所は瓦の散らばる廃墟であった。

数日のち，長安の街中でまた出会う。「私は狐だから」とことわるのに，無理に婿入りしたところ，裁縫だけはできないが，生活費はすべてみついでくれる。おかげで数年あと，みごと任官して赴任することとなった。いやがる妻を馬にのせ，長安の西郊の荒野にさしかかると，数匹の野犬が後をつけてきて，わずかのすきに狐の妻をさらって食い殺した。道ばたに残るは，ちぎれた衣と首飾りだけであったそうな。■



キツネ属　*Vulpes*

キツネ属の動物は、イヌ属の動物よりも一般に小型で、吻（ふん）が長く先が細くとがり、尾が太く長く頭胴長の2分の1、またはそれ以上ある。耳介（じかい）は三角形で先がとがり、瞳孔（どうこう）は明るいときは針状に細くなる。頭骨は横から見ると上縁がほとんど一直線で、額の部分の骨に前頭洞（ぜんとうどう）と呼ばれる空洞がなく、上あごの犬歯が細く長い。

北アメリカ、ユーラシア、アフリカに分布し、アカギツネ *Vulpes vulpes*、チベットスナギツネ *Vulpes ferrilata*、オジロスナギツネ *Vulpes ruppelli*、コサックギツネ *Vulpes corsac*、ベンガルギツネ *Vulpes bengalensis*、ケープギツネ *Vulpes chama*、ブランフォードギツネ *Vulpes cana*、オグロスナギツネ *Vulpes pallida*、キットギツネ *Vulpes macrotis*、スイフトギツネ *Vulpes velox* の10種がある。

また、キツネ属にごく近縁のものに、フェネック属 *Fennecus*、ハイイロギツネ属 *Urocyon*、ホッキョクギツネ属 *Alopex* がある。タヌキ属 *Nyctereutes* や南アメリカのアザライヌ属（クルペオ属ともいう）*Dusicyon*、カニクイイヌ属 *Cerdocyon*、コミミイヌ属 *Atelocinus* などはやや縁が遠く、キツネ属とイヌ属のほぼ中間に位置するとみてよかろう。

次に、キツネ属のうち、アカギツネをとりあげてくわしく述べてみよう。

アカギツネ　*Vulpes vulpes*

アカギツネはたんにキツネとも呼ばれる。北半球に広く分布し、むかしから人間にとって油断のならない隣人として、多くの物語や伝説、詩などに詠まれている。日本の民話には、キツネが人を化かす話が多くみられるし、古くはギリシャの寓話作家イソップの物語に、また中世フランスで語られた寓話詩「狐物語」にも、キツネは悪知恵にたけた小気味よい動物として登場している。

アカギツネの生息地は、ヨーロッパ全域、北アメリカ、アジア、アフリカ北部にわたる北半球の大部分を占めている。これらの地域は気候的にはツンドラ、亜熱帯林、半砂漠をふくんでおり、アカギツネがいろいろな環境にうまく適応していけることを示している。

アカギツネのなかで、いちばん毛の色のきれいなのは、北極地方のアカギツネである。南へ下るにしたがって、毛の色はだんだん薄くなり、からだも小さく、きゃしゃになっていく〔注1〕。また、平野や沼地産のキツネ

アカキツネ。キツネ属。
北にいけばいくほどアカギツネは美しく
大きく、毛並みが厚く、尾がいっそう
ふさふさとしてりっぱになる。

PH. J. OTT



アカギツネ。キツネ属。
オッ，あそこを横切ったのは確かアナウサギ！
このオレ様の姿に気づいて逃げたかな。
しかし，そうは簡単に逃げきれないぞ。(上)
PH. BAVARIA-SCHÜNEMANN

は，一般に山岳地帯にいるものより色合いがきたない。キツネの毛の色調は，そのすんでいる場所に応じて変化が著しい。

毛並みは柔らかく密生しており，赤っぽい鹿毛色か灰色である。からだの上部は，さびた赤かだいだい色で，胸から腹部にかけては灰白色，前肢（ぜんし）の大部分は赤茶色で，耳介（じかい）の外側と後肢（こうし）の下部は黒い。尾は黒ずんださびた赤かだいだい色で，先端が白くなっている。

この密生した毛のために，アカギツネのからだは実際よりも太くみえるが，体重は４～10キロしかない。体長は60～75センチ，尾長50センチほどで，地上から肩までの高さは大きいもので約40センチである。からだつきは細長くて，太く長い尾が特徴的であるが，尾のつけ根に近いところには《スミレ腺(せん)》と呼ばれる皮脂腺(ひしせん)がある〔注２〕。この腺は繁殖期になると，とくに活動が活発になる。４本の肢（あし）は，比較的短く，前肢には５本の指が，後肢には４本の指がある。おのおのにつめがついているが，それらはかなり鋭い。鼻づらは細長くとがっており，耳はまっすぐに立っている。目は少しつりぎみで，瞳孔（どうこう）は光のかげんにより，円形から針状にまで変化する。

アナグマの"いそうろう"

アカギツネは，ふつう１か所に居を構えている。そこは非常に用心深く選ばれ，木の根のあいだとか，岩の深い割れめとかであることが多い。繁殖期と育児期間以外は，アカギツネは，ほとんど単独生活をしているのだが，アナグマと同居していることもある。この場合でもとくにアナグマと気が合ってルームメイトになっているというわけではなさそうだ。キツネは穴を掘るのが不得手なので，ちゃっ



アカギツネの分布は
ヨーロッパ，北アメリカ，アジア，アフリカ北部と
北半球の大部分にわたる。
このように，アカギツネは
いろいろの環境にうまく適応していける。(下)



かりアナグマの巣穴にいそうろうを決めこんでいるのである。ときには，先住権をもつアナグマのほうが，アカギツネに巣穴を明け渡して出ていってしまうこともある。しかし，アカギツネの名誉のためにいっておかねばならないが，アカギツネがアナグマを追いはらおうとして巣の入り口を排泄物でよごすという話は正しくない。だが，この共同生活も，アカギツネがアナグマの冬眠をかき乱したりすると，血みどろの戦いになることがある。勝つのは，アナグマである。

自分で丘の斜面などに穴を掘ることもある。そのようなとき，巣穴へ通ずる坑道には，ゆるやかな傾斜をつける。

アカギツネは，春から夏にかけて子を生み，育てるが，その間は，巣穴にこもっていることが多い。秋になって子どもたちが一人まえになると巣を捨てて，深いやぶのなかとか，木の枝や石がいくつも積み重なったすきまとか，枯れたヤナギの幹の下などで暮らす。

アカギツネはどちらかというと夜行性である。しかし，静かであまり危険を感じないようなところであれば，昼間でも日々の糧を求めて歩きまわる。天気のよい日には，木の古い幹の上や石の上に身を横たえて何時間もじっと動かず日なたぼっこをしている。じゃまするものがないと，安心してうとうととまどろんだり，イヌのようにいびきをかいたり，まったく熟睡してしまって，狩人やイヌが近寄ってきても気がつかないことさえある。

頭を使って獲物を狩る

アカギツネは，とくに齧歯（げっし）類を狩りたてる。ノウサギ，アナウサギ，ネズミ類などがそのおもな食糧だが，子ジカも食べるし，地上につくられた鳥の巣も荒らす。

アカギツネは，齧歯類や鳥の前で，よく，踊るような動作をしたり，死んだまねをしたりして，油断して近づいた相手を捕えるという。また，水鳥を求めてどろ沼のなかを泳いだりもする。夜間，または，近くにうまい隠れ家があれば日中でも，鳥小屋に忍びこんで家禽を襲う。

春から夏にかけて，子どもを養わねばならないときには，親ギツネはたけだけしくなる。子ギツネたちは，ネズミでは満足せず，より大きな獲物のほうを喜んで食べるからである。雄は雌ほど熱心には獲物をとらないといわれる。ブドウ園や菜園でバッタやコガネムシを追い，昆虫（こんちゅう）の幼虫やミミズな

アカギツネ。
おかしいなァ。たしかこの辺の草陰に
とびこんだのを見たのだけれど……。（上）
PH. BAVARIA-SCHÜNEMANN



アカギツネ。
クンクン。まさか木に登ったわけでもあるまい。
黒ストッキングの美しい足で踊ってみるか。
この手で鳥をとったこともある
自慢のキツネダンスを。（下）
PH. K. MASLOWSKI





ども食べる。よく熟していれば，木の実も大好きである。小川の岸で何時間も粘って魚やザリガニをとったり，海岸では漁師の網から魚をかすめとるし，森では狩人がわなに仕掛けておいたえさを盗んだりもする。

大地が雪におおわれて食糧不足になると，どんなものでも食べる。死んだ動物の肉でも，古くてかわいた骨でも，腐った皮の切れ端でも食べる。

アカギツネは非常に利口な動物であるという評判が高いため，いろいろな話がつくられている。たとえば，球のように丸くなって防御の形をとっているハリネズミを殺すのに，アカギツネは尿をかける。哀れなハリネズミはこの悪臭を放つシャワーで息がつまり，からだをのばしてしまい，そこをアカギツネにかじられてしまう，というのである。

また，アカギツネはその長く太い尾を水のなかに入れ，カエルが食いつくのを待って，尾を急に引っこめて振り，カエルを土手の上に落とすともいわれる。ミツバチに刺されずに，うまくその蜜をとるともいわれる。

アカギツネは用心深くて，新奇なことには決して心を許さないが，それは狩りをするときにも変わらない。しかし，空腹にかられると，やむなくふだんよりいくらかぶ用心になる。昼日中，農家に現われて農夫の目の前でニワトリのひなを食べたりするのはこんなときである。

アカギツネは走るのが非常に速く，機敏で耐久力もある。狭いところへ音もたてずにすべりこみ，驚くほどの跳躍をする。小走りに走っているときのアカギツネの尾は，まっす

アカギツネの子。キツネ属。
おなかすいたな。かあさんはまだ帰らないかな。
外界を好奇心に満ちた目でながめる子ギツネ。
ときは初夏，マツの若芽も子ギツネも若い。(上)
PH. R. LONGO

アカギツネ。
ノウサギのごちそうにありついたアカギツネ。
ネズミ類やウサギ類をもっとも多く食べるが
果実や爬虫類，昆虫もアカギツネのえさになる。
残りを土中に埋めておく計画性もある。(下)
PH. F. BEL–G. VIENNE–JACANA

アカギツネの瞳孔は
イエネコのそれのように，光の加減によって
針のごとく細く，また黒く大きな円形にまで
変わる。(右)
PH. J. SIX





アカギツネ　キツネ属
かれらの行動圏は広く，たがいに重なりあう
最近の調査では，1頭当たりの行動圏が
ほぼ4平方キロくらいとみられている
PH. BAVARIA-SCHÜNEMANN



て後方にのびているが、ふつうに歩いているときは、尾はほとんど地面に引きずるくらいにたらしている。ふつう、獲物を待ち伏せているときは腹ばいに寝ているが、必要とあらば、泳ぎも木登りもじょうずにする。かなり高い木の枝に長々とからだをのばしているアカギツネを見ることも珍しくない。

アカギツネの鳴き声は、短いほえるような声で、終わりは鋭い金切り声のようになる。一人まえになったものはあらしの前とか、雨風の激しいとき、きびしい寒さの冬の間、それに交尾期などによく鳴く。これと反対に、まだ成長しきっていないものは、空腹であったり、退屈したときなどによく鳴くという。

キツネ一家の1年

交尾期は1～3月の間である。発情期には、何匹もの雄たちが雌のあとをつけていって周囲に集まる習性がある。体臭はこのころ、いっそう強くなり、ふだんよりよくほえるようになる。雄たちのあいだではひんぱんに闘争が行なわれ、けがをするものも多くなる。

雌は、分娩（ぶんべん）のために自分で掘った急ごしらえの坑道の中で、また、準備ができているときは分娩のための巣で、そのほか木のほらとか、石や木の枝を積みあげたところとか密生したやぶのなかなどで子を生む。

妊娠（にんしん）期間は約52日間で、2月から5月に4～7匹の子が生まれる。生まれたとき、子の目はまだ開いていないが、からだはつやのある灰褐色のむく毛におおわれていて、尾の先だけが白い。からだつきはずんぐり、どっしりしている。生まれて2週間ほどで目が開くが、もうそのころには最初の歯がはえている。

母親は非常に気を使って子どもたちを養い、はじめの数日間は子どものそばを離れないでいる。その後は、夜になると、子どもの食糧を捜すため、数時間だけ、子を残して狩りに出かけていくようになる。

1か月か1か月半たつと、子ギツネたちは顔つきがややとがって、いわゆるキツネっぽい顔つきになり、錆色のうぶ毛に包まれて母親のゆきとどいた監視のもとに巣穴から出てくる。

母親は、子どもたちが乳離れするやいなや、ネズミ、小鳥、カエル、昆虫（こんちゅう）の1グループをなす鞘翅（しょうし）類などの生きた動物を食べるようにならしながら育てる。そして獲物のじょうずなとり方を教える。

危険から子どもたちを守ろうとして移動するときには、細心の注意をはらって子どもを1匹ずつ口にくわえて運んでいく。夏になれば、子ギツネたちも母親のあとについて狩りをしにいくことができるし、自分たちだけでもなにがしかのえさをとることができる。7月の終わりにはキツネの母子は、生まれ育った巣穴を捨てて、畑や森や灌木の茂みのなかを転々とする。秋の末ともなれば、子ギツネたちは完全に独立する。

アカギツネは一般に、繁殖期だけつがっている。雌が生きていれば、雄は子どもと遊ぶ以外はいっさい子どものめんどうをみない。しかし、母親が死ぬと雄は子を育て養う役を引き受ける。

[illegible]
[illegible]の繁殖期で、[illegible]
[illegible]が非常に[illegible]する時期でもある
雄は[illegible]期間、なわ張りを[illegible]、雌を戦いとり[illegible]
[illegible]を求めてうろつきまわる（上）
PH. [illegible] PHOTO



[illegible]の子は
[illegible]間、[illegible]獲物の[illegible]を教えられ
[illegible]遊びのうちに[illegible]を身につけ
[illegible]の終わりにはひとりでえさをとれるようになり
やがて、親[illegible]から[illegible]していく
PH. G. QUEDENS





アカギツネをほろぼすもの

アカギツネは、わな、毒、銃と猟犬の群れなどなど、多くの手段で狩りだされている。また、人間の使う農薬の害がアカギツネの食物となっている小鳥や動物を通してアカギツネにまで及んでいる。

アカギツネの主食はネズミ、ウサギなどの齧歯（げっし）類で、かれらは飢えを満たすのに必要なだけの量をしか殺さない。それはネズミにして、1日、20～30匹である。しかし、ときには必要以上に多くの齧歯類を殺すこともある。この齧歯類のなかには人間にとって有害なものもふくまれており、この点からみればアカギツネは有益獣であるといえる。

狩猟の対象となる鳥獣を狩猟家たちのために保護している狩猟鳥獣保護区では、アカギツネが、せっかく保護されているキジ、ウズラ、ウサギなどを食べてしまうので有害である。しかし、大自然のなかの森や平原では、アカギツネはとくに有害な動物ではない。

キツネ狩りは、ヨーロッパで盛んだが、そもそもは、アカギツネが家禽などに害をなすので退治しようとして始まったのだという。それがしだいに狩猟そのもののおもしろさに重点が移ってしまい、今では貴族のスポーツとして有名である。とくにイギリスでは、アカギツネを特別な法律で保護しているが、それも貴族たちの社交行事としてのキツネ狩りのシーズンに狩られるキツネを確保するためなのである。人間はウマに乗って多くの猟犬を従え、広い狩り場にキツネを追う。猟犬が追いつめたキツネの最期を見届けた人には、そのキツネの尾が記念に贈られる。

アカギツネの災難は、キツネ狩りのシーズンだけではない。このようなスポーツとはまた別に、その毛皮が目的でキツネを狩る人も多いからである。とくに北極地方のアカギツネの毛皮は珍重されていて、ソ連ではキツネの皮の売買が盛んである。

アカギツネの天敵は、人間とオオカミ、それに大きな猛禽（もうきん）類のイヌワシ、クマタカなどであるが、寄生虫や伝染病もアカギツネを痛めつける。〔注3〕

ヒフバエなどのハエの幼虫は、キツネの皮膚の下にトンネルを掘って、毛皮をいためる。草原地帯では、ハタネズミやヤチネズミなどの齧歯（げっし）類がふえると、それを食べるアカギツネがふえる。一定の地域にすむアカギツネの数が多くなると、個々の行動圏が大きく重なり合うために、伝染病や寄生虫をもった個体に他の個体が接する機会が多くなり、ために伝染病や寄生虫の流行が起こる。病気になったアカギツネが次々と死んで個体数が減ると、健康な個体のみが残り、ふえて、病気や寄生虫の流行もおさまるのである。人間がわなを使ってアカギツネをとり、個体数をコントロールし、ひいてはその健康状態までもコントロールしてやることもある。

狂犬病も、アカギツネのかかる恐るべき病気である。狂犬病にかかったアカギツネは非常に弱って、人に追われても逃げる力もないくらいだが、近寄って捕えようとするとかみつき、イヌに病気をうつしてしまうこともある。

アカギツネは [illegible]
どんな気候にも、どんな環境にも適応でき
山から平原まで、広い範囲に生息している
PH. HOLMES LEBEL

[illegible] *Vulpes pallida* [illegible]
体長40～50センチ、尾長25～4[illegible]センチで [illegible]
アカギツネより小型で、長い耳をもつ [illegible]
アフリカ、中央アジアの乾燥地帯にすみ
おもにネズミ類を食べる（上）
PH. W. LUMMER

[illegible]
極北の長い冬の間、[illegible]の毛並みは
このように純白になり、[illegible]する
足の先までをおおう長い毛が、寒さから身を[illegible]
短い日照時間を楽しんでの日なたぼっこ [illegible]
PH. F. BREHMER









アカギツネの子どもたち。
春生まれた子ギツネは，6週間もすると
母親について巣穴から出てくる。
危険を感じると母ギツネは子ギツネをくわえて
引っ越し，転々と巣穴をかえる。（35－10，11）
PH. F. BEL & VIENNE JACANA

フェネックギツネ。フェネック属。
頭胴長約40センチ，尾長約25センチと小さいが，
耳介は15センチと大きく，聴覚もすぐれている。
アフリカ，アラビア半島の砂漠にすんでいる。
PH. VISAGE JACANA







ホッキョクギツネ属 *Alopex*

ホッキョクギツネ

Alopex lagopus

ホッキョクギツネはアカギツネと外形がよく似ているが、まったく別の種で、ホッキョクギツネ属の1属1種である。

アカギツネより小さくて、全長が90センチを越えることはない。全長の3分の1は、ふさふさした長い尾である。耳はアカギツネより短くてまるみがある。吻（ふん）もアカギツネにくらべて短く、肢（あし）のつめも鋭い。足うらには長い毛がはえていて、体温の消耗が少なくてすむように極北の冬の寒さから

[illegible] *Vulpes vulpes fulva* [illegible] 雪の上 [illegible] は走るとき [illegible]、後肢が前肢の足跡に重なる [illegible] をするため、雪の上には [illegible] 足跡が一直線に [illegible]
PH. [illegible]

[illegible] 赤、黒、銀などの色型がある [illegible] としては非常に高価である [illegible]
PH. [illegible]

[illegible] *Vulpes macrotis* [illegible] 北アメリカ [illegible] 西の中南部 [illegible] 頭胴長37～50 [illegible]、尾長22～30 [illegible] 尾の先が [illegible]
PH. [illegible] WORMER



守られている

ホッキョクギツネには、《青》と《白》の2種類の色型がある。《白》と呼ばれる型は、夏の間は土や岩の色に似た、多少灰色がかった土色をしていて、冬にはオコジョのようにまっ白になる。《青》といわれる型は1年を通じてデリケートな灰青色をしているが、冬の間は黒味がかったり、個体によって毛の色に変化がある。毛皮が珍重されているのもこの《青》で、とくに青、灰色の毛が喜ばれる。

ホッキョクギツネのあいだで《青》の色型のものが占めている割合は地方によって異なる。カナダの北では1パーセント前後だが、グリーンランド西部では50パーセント近くになり、ベーリング海峡の島々ではさらに高いパーセンテージに達している。

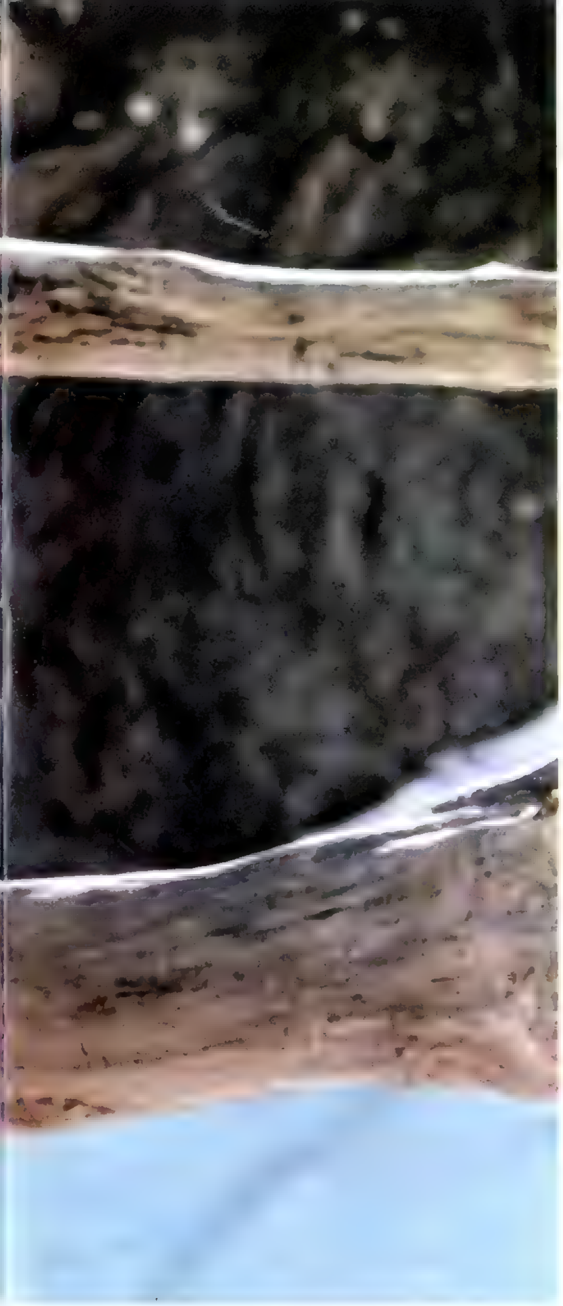
ここから一般的な法則を引きだしてみると、《白》は雪の多い地方にたくさんいて、《青》は海岸、島、日当たりのよい山といった、雪が少ないところにいる。1916年以来、とくにアメリカでは毛皮をとるために《青》の飼育が盛んである。

《青》も《白》も、夏よりは冬のほうが毛が



アメリカアカギツネは
ちょっと傾いているような木ならば
忍者さながらにトトト…と駆けあがる。
たまには高みの見物としゃれるのだ（上）
PHOTO: …

ホッキョクギツネは
きびしい自然条件によく適応して生きている
どんなものでもかれらの食糧になってしまう
齧歯類のレミングからこのような海獣の屍肉まで
捜し求めて食べている（下）
PHOTO: W. DISNEY PRODUCTIONS





濃密になる。とりわけ背中の毛は目だって長くなる。ホッキョクギツネの生息している北極地方の夜のやみが長ければ長いほど、ホッキョクギツネの毛も長くなるのである。

名のしめすとおり、ホッキョクギツネは新・旧大陸のもっとも北の地方に生息している。ホッキョクグマのように、流氷に乗って自分のなわ張りを移動する。しかし、一般にヨーロッパでは北緯60度以南、北アメリカでは北緯50度以南には、ほとんどくることがない。寒さにはかなり適応でき、零下50℃の気温にも耐えられる。

ホッキョクギツネが、かくも寒さに強いのは、ひとつにはそのすばらしい毛皮のためである。それに加えて、短い吻、ふんだんに毛の密生した足うらなどが、体温の失われるのを防ぐ役目をしている。

ホッキョクギツネの基礎代謝はきわめて低い。量は気温が零下20℃に下がってはじめて増大しはじめる。

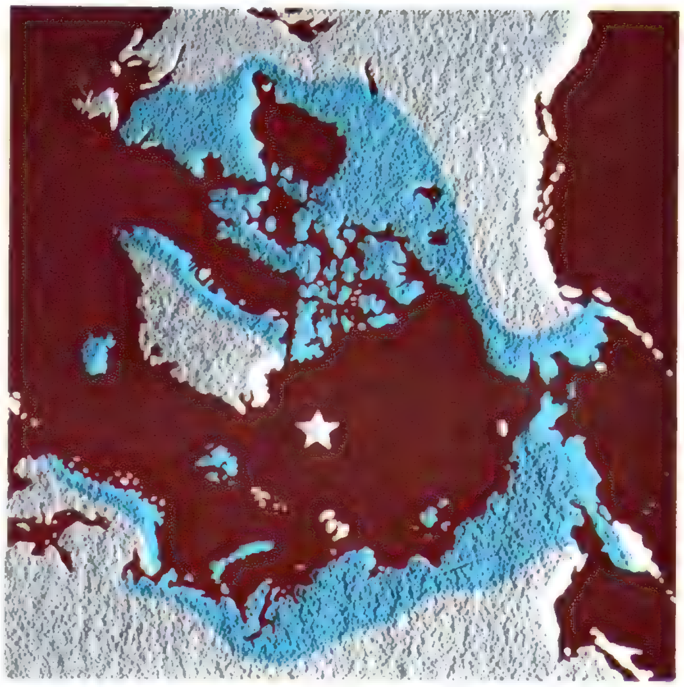
これは、寒い地方で生きていく動物の保温機能がすぐれている1例である。熱帯地方に生活している毛皮動物では、ふつう気温が25℃以下になると体温の低下を防ぐため、はやくも基礎代謝量が増大する。

そこで、ホッキョクギツネの温度に関するおもな問題点は、長時間、獲物を追って走るなどの激しい運動をしたあとで体温が急激に上昇した際、体内に生じた過剰なカロリーをいかに清算するかということになる。ホッキョクギツネの天賦の保温装置の毛皮が熱の放出を妨げているので、このようなときは舌を出し、呼吸も早くなって放熱を盛んにするのである。

酷寒の地に生きる

アカギツネのように、ホッキョクギツネは丘の中腹に巣穴を掘る。かわいた粘土質か砂地のところが好きなようだ。巣穴の中心になる部屋は、高さ40センチ、幅60センチほどあり、かれらは代々そこにすみついて、かれらの巣穴を徐々にすみよく増改築していく。

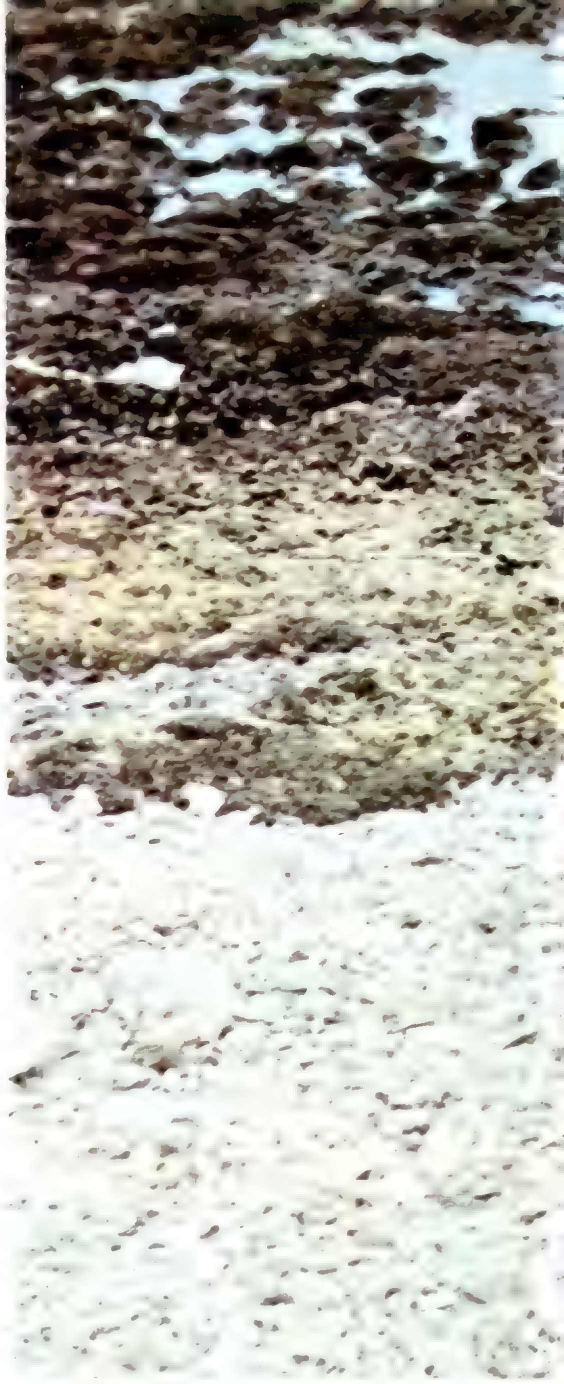
ホッキョクギツネ（ホッキョクギツネ属）これは《青》の色型のもので、その毛皮は1年を通してまっ白になることは決してない。かれにとっては不幸なことだが、この毛皮は人間のあいだで非常な人気を呼んでいる。上
PH. P. MONTOYA-JACANA



ホッキョクギツネの分布は
その名のとおり，ほぼ北極地方に限られる







したがって、この隠れ家は、きわめて複雑なものとなり、長さは30メートル以上にもなって、いくつもの出入口がある。1つの丘にホッキョクギツネの巣穴がいくつもあるときは、そのあたりにホッキョクギツネの食糧が豊富にあるのだと思ってよい。石だけの土地で巣穴が掘れないときには、岩の下とか起伏のあるところに隠れている。

ホッキョクギツネの適応力の強さは、その食生活によくあらわれている。かれらの主食は、海岸に打ちあげられた哺乳（ほにゅう）類の死骸、干潟でとった魚、齧歯（げっし）類、人間の捨てた残りものなどである。万物が雪におおわれてしまう冬には、どうして食糧を手に入れるかは大問題である。ホッキョクギツネは、えさをあさり歩く大きな動物――ホッキョクグマ、オオカミ、クズリなど――の食べ残しにありつこうとして、かなりの距離をついて歩く。

ある地方では、ジャコウウシやトナカイの群れのあとを追っていく。群れのなかの死んだものやいまにも死にそうなものを食べる機会があろうかと期待しながら。まったくなにも食べるものがないときは、動物のふんでも喜んで食べる。

海岸は、ホッキョクギツネにとって魅力あるところである。というのは、海岸は内陸にくらべて雪も少なく食べ物にぶつかることも多いからである。海岸に巣をつくる海鳥の群れは、ホッキョクギツネにとっては無限の食糧供給源である。鳥をつかまえようとしてホッキョクギツネは、よくずるい手を使う。地面に身を伏せて待ち、油断して近づいてきた鳥を、飛びたつ直前に襲って捕えてしまうのである。齧歯（げっし）類のレミングがいる地方では、ふつうの分布域よりも南のほうまで、レミングの一時的な移住について下ってくることがある。

食糧がたくさんあると、その一部を土中に埋めておき、腹が減ったらまたもどってきて食べられるようにしておく。この食べ物の余りは鼻づらを使って、注意深くほかの動物の目にふれぬように隠しておく。スピッツベルゲンの氷河の堆積のなかに、おそらくこのホッキョクギツネの余剰食糧貯蔵庫とみられる大量の軟体動物が見つかったという。

グリーンランドでは、ホッキョクギツネはヨーロッパのアカギツネのようには人間を恐れないようである。極端に食糧が乏しいので多少の危険をおかしても食糧を手に入れねばならないからであろう。狩人の獲物をねらってあとをついてくることもあるし、狩人のそりの中の食糧を盗むこともある。また、夜、狩人が眠っている間に毛布を食べられたこともあるという。

18世紀のある探検家はホッキョクギツネと



ホッキョクギツネ ホッキョクギツネ属
短い吻と小さい耳，ほおのうしろから長くなりえり巻きのように頸部をおおう豊かな毛が特徴。これも《青》の色型で，グリーンランド西部やベーリング海峡の島々に多くいる。（上左）
PH. MONTOYA / JACANA

ホッキョクギツネは
ヨーロッパでは北緯60度以北，北アメリカでは北緯50度以北の地方に生息している。
かれらは自分のなわ張りのなかを移動する際に漂う流氷に乗っていくこともあるという。（下）
PH. RUSS KINNE PHOTO RESEARCHERS

ホッキョクギツネ
このりっぱな毛皮が外気との絶縁体となるため零下50°Cくらいまでの寒さは平気である。（上中）
PH. MONTOYA / JACANA



のつきあいの記録を残しているが、それには次のように書かれている。

「ホッキョクギツネは、カムチャツカの東のベーリング島に、おそらく流氷に乗って運ばれ、海岸に打ちあげられたものを食べて数がふえていったのであろう。われわれがこのベーリング島に滞在していた間、この動物の習性をよく見ることができたけれども、かれらはずるいことと、あつかましいことでは人後におちない。

夜となく昼となく、わたしたちのキャンプにはいってきては、キツネにとってはなんの役にもたたないと思われる包丁とか棒とか袋とか、靴、ソックスなどをさらっていった。干し肉のはいっている樽から干し肉を引きぬくのも非常にうまかったし、われわれが肉を切っているとそれを奪おうとして押しあい、へしあいやってくるので、ホッキョクギツネと戦わねばならなかった。穴を掘って隠しておいてもすぐ見つけだしてしまい、重しにのせておいた石を肩で押したりして助けあってどかしてしまう。

ホッキョクギツネは、われわれの持っているものはなんでもし、ビーバーの皮のおおいまでも持っていこうとしたので、ビーバーを殺したりすると、かれらに奪われないように、その上に人間が寝ていなくてはならない。それでもホッキョクギツネはビーバーの肉を食べようとするので、われわれは絶えず目をさまされ、かれらを追いはらうために棍棒を持って眠るはめに陥ったのであった。

地上に寝ていると、もしかして死んでいるのではないかと、においをかぎにくるのであった。

毎朝、ホッキョクギツネは、砂浜で眠っているアシカやアザラシが死んでいはしないかと、ふんふん鼻をならしながら浜べを走る。アザラシが不注意から自分の子どもを窒息させてしまうことがあるが、そうした子どもの死骸をさらおうとして、アザラシの群れのなかに、毎朝うまくもぐりこんでいる。死骸を見つけると、肉片を巣穴にもっていこうとして、

ホッキョクギツネ
北極狐は、[illegible]にも早いおそる
ロ[illegible]なところもある
すもにはあまり感心しないところだ
[illegible]食糧を埋すのも[illegible]
PHOTO H. MACPHERSON



ホッキョクギツネ
夏の間、黒褐色であった背のまも、秋になるにつれて、白くはえかわり
冬には全身がまっ白または青灰色におおわれる
毛も夏毛より長くふさふさしてくる
PHOTO H. MACPHERSON



急いで細かく切ってしまうのだった。

高い子ギツネの死亡率

繁殖の時期は地方によって異なっているが，だいたい，３月の中旬である。極北のいてつくきびしさのなかを，雄は雌を求め，非常に長い距離を走りまわる。

ホッキョクギツネはもともと多産な動物であるが，子どもの死亡率もたいへんに高い。ときには，１腹の子のうちの半分が死んで生まれることさえある。これは，根本的には母親の栄養不良が原因である。レミングがふえたときなどは，食糧がたくさんあるので，１腹の子は８～10匹が，みな死なないで生まれ育つ。ところが，齧歯（げっし）類が少ない地方では，１腹の子が６～８匹しかいなくて，しかもそのうちの３，４匹が死んでしまうのである。

ホッキョクギツネの雄は，父親としてすぐれている。雌や子どもに食べ物を運び，危険におびやかされれば，自分のほうに敵の注意をひきつけて，敵をまこうとする。

ホッキョクギツネの天敵は，かれらの分布域の最南部では，オオカミ，クズリなどであり，アカギツネもはいるのである。

フェネックギツネ。フェネック属。
尾の先がかすかに黒く，毛並みは砂の色に近い。
乾燥地によく適応してすみつき
ほとんど水を飲まないで生きていける。(上)
PH. J. SIX

フェネック属 *Fennecus*

フェネックギツネ *Fennecus zerda*

フェネックギツネは１属１種で，からだはホッキョクギツネよりもさらに小さい。肩高は20センチを越えることがなく，全長は約65センチ，うち25センチほどが尾長である。毛皮の色が非常に明るく，大きな目と，長さ15センチを越えるほどの大きな耳介（じかい



フェネックギツネの分布
エジプト，アラビアなどの
砂地の多い地方にすむ。



フェネックギツネの毛並みは
冬は下毛がはえて厚くなりヒツジのようだが
春に抜けかわり，夏は薄く柔らかくなる。(下右)
PH. J. P. VARIN / JACANA







が，アカギツネ，ホッキョクギツネなどとは異なって独特である。

しかし，前肢（ぜんし）に5本，後肢に4本の指をもっていること，鼻先がとがり，からだがしなやかで毛のふさふさした長いしっぽをそなえていることなどは，キツネのイメージに合致する。

毛は砂の色に近く，腹部では明るい白である。夏には毛は柔らかいが，冬には羊毛のような下毛がはえて毛並みは厚くなる。下毛は春になると落ちてしまう。

フェネックギツネ
かつて砂漠に不時着した飛行士に声をかけたのは
このフェネックギツネではなかったろうか
青白い月光を吸いこんだ大きな黒いひとみが
孤独な詩人の心を慰めたことだろう（上）
PH. DRAGESCO-ATLAS PHOTO

フェネックギツネの子は
約51日の妊娠期間を経て，春に生まれてくる
2～5匹の兄弟であることが多い（下左）
PH. F. PETTER-JACANA

フェネックギツネは
砂丘の陰などに巣穴を掘ってすんでいる
昼間は穴の中で暑熱を避け
夜になると獲物を捜しに出ていく（下右）
PH. F. TONDEUR-ATLAS PHOTO



砂漠に穴を掘る

フェネックギツネは砂漠に生息している。アルジェリア、チュニジアの砂漠、エジプト、アラビア、リビア、フェザン、シナイなどの砂地の多い地方がかれらのすみかである。

穴掘りの名人であるフェネックギツネは、砂丘の陰に気持のよい巣穴を掘って昼の砂漠の暑熱を避けている。巣穴は、坑道をたどっていくと、ぽつんとある孤立した中央の部屋に通じるようにできていて、そこには柔らかい羽根や毛、シュロのすじなどが敷いてあり清潔である。この中央の部屋で、フェネックギツネはからだを丸め、長いふさふさした尾のなかに頭を突っこんでいる。

フェネックギツネは夜行性の動物である。砂漠では、もともとえさはたいへん少ないのだが、それを非常に発達した聴覚、嗅覚（きゅうかく）、視覚などの感覚と、敏捷さで補って、たくさんのえさをとるし、自分のなわ張りを短時間で見回ることもする。この領域は、雄がイヌのように足をあげてする尿によってしるしをつけられ、きめられていて、繁殖期にはとくにこの習性がひんぱんになる。

フェネックギツネのえさは、イナゴ、トリ[illegible]、トビネズミ、そして鳥類がとくに多い。どんなにわずかなけはいでも、フェネックギツネの鋭い目はとらえてしまう。そして、用心深く獲物に近づいて、ひと跳びでつかまえる。卵が大好きだが、漿果も食べる。

その生息地にえさが少ないので、フェネックギツネは広範囲に分散してすまざるをえない。そこで、交尾期などには、仲間以外のものには聞きとれない音を使って仲間どうしの連絡をとりながら食糧を捜す。〔注4〕

大きな耳介（じかい）のある耳には、多くの砂漠にすむ動物と同じく、きわめて発達した聴胞（ちょうほう）がそなわっている。この聴胞は、音がよく聞きとれるように増幅する反響箱である。〔注5〕

フェネックギツネの子どもは、約51日間の妊娠（にんしん）期間を経て、3月に2～5匹が生まれる。生まれたときは黄色い毛をしていて、目は閉じている。母親は、よく子どもたちのめんどうをみる。

自力で巣穴を掘れる程度に大きくなっていれば、捕えられても容易に人間に飼いならされる。寒さから守ってやりさえすれば、12年ぐらいは飼育下でも生きながらえる。



大きな耳介と耳の内にある聴胞で
遠くの音や振動をキャッチし、獲物を捜したり
仲間との連絡をとったりする

のはどんな味がするのだろうか
それに運がよければ
鳥さえもつかまえて食べる。（下）

キツネとオオカミ

今泉吉典

陸にすむ野生の哺乳類のなかでもっとも分布が広いのは、おそらくオオカミとアカギツネであろう。どちらもユーラシアと北アメリカの大部分に分布し、アカギツネはさらに北アフリカにまで達している。気候的には熱帯から寒帯までのほとんどあらゆる環境にすむが、このように環境適応性の強い哺乳類は多くない。

1つの種類で、分布が目だって広いのはネコ科のヒョウ、オオヤマネコ、ピューマ、クマ科のヒグマ、イタチ科のオコジョとクズリ、シカ科のトナカイとヘラジカなどである。しかし、ピューマは南北アメリカに分布が限られ、オオヤマネコ、オコジョ、クズリ、トナカイ、ヘラジカなどは、ほとんど寒帯に分布が限られている。ヒグマはユーラシア、北アメリカの寒帯林に、それに今は絶えてしまったが19世紀の末までは、北アフリカの山岳地帯にも生息していたし、また地方によっては亜熱帯にまで分布する。しかし、亜熱帯や温帯での生息域は局限されているから、オオカミやアカギツネよりはかなり分布が狭い。

共存共栄の理由

このように、オオカミとアカギツネは北半球でもっとも繁栄している哺乳類であるが、かれらが共存しながらも繁栄できたのは、同じ肉食性といっても、生活様式が微妙な点で異なるためであろう。

オオカミは獲物を走って追いかけ、しばしば群れをつくって協力するため、自分よりもずっと大きな動物を殺すことができ、主食はシカ類である。走って獲物を追いかける猟法に適して四肢が長く、胴は比較的短くて腹部が締まり、胸が深い（上下の高さが高い）ため肺活量が大きい。獲物を殺す武器の犬歯（きば）は、キツネほど長くはないが、太くがんじょうである。上あごの門歯（前歯）には、のこぎりの歯のような3個の突起がある。

ところが、アカギツネは群れをつくらず、単独でこっそり忍び寄ったり、待ち伏せて獲物を捕える。四肢はどちらかといえば短くて、長距離を走るのにはそれほど適していない。胴が長く、からだがしなやかなのは、身を伏せたり、主食のウサギやネズミを追いかける際に、急角度の方向転換をしたり、とびあがったりするのに適応したものであろうが、太く長い尾はこのようなとき、舵（かじ）の役目をする。犬歯は細くてがんじょうではないが、長く鋭く、ひとかみで獲物に致命傷を与えることができ、門歯には鋸歯（きょし）状の突起がない。

楕円形と同心円のひとみ

狩猟方法の違いは、オオカミとアカギツネの瞳孔（どうこう）の形にまで影響しているらしい。オオカミの瞳孔は明るいところでも形は変わらず、円が小さくなるだけだが、アカギツネの瞳孔は明るくなると縦長の楕円形になり、さらに光線が強いと針のように細くなる。

明るいとき、針のようになる瞳孔は、小型のネコ類やジャコウネコ類など、草やぶに身をひそめ、その茂みを通して獲物をねらうものによく見られる。一方、同じネコ類でも、大型で草の上に頭を出せるトラ、ライオン、チーターなどでは瞳孔がまるい。

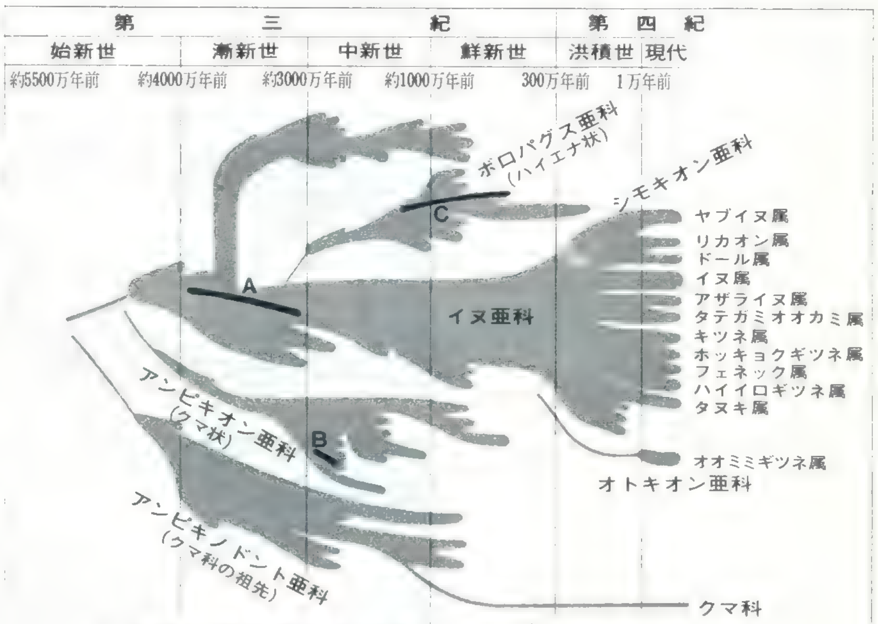
瞳孔の形の生態的な意義は明らかではないが、からだの大きさや狩猟の方法に、密接な関連があるように思われる。

イヌ科動物の盛衰

イヌ科は約4000～5500万年前の始新世に現われて以来、多くの類に分かれた。

イヌ科とはいっても、オオカミやキツネに似たものだけではなく、ジャコウネコに似たもの（プソイドキノディクチス *Pseudocynodictis* など）、ハイエナに似たもの（オステオボルス *Osteoborus* など）、クマに似たもの（ダポエノドン *Daphoenodon* など）も現われたが、これらの変わりものは、まもなくほとんどが姿を消し、約300万年前に始まって現代にいたる第四紀まで栄えているのは、オオカミやキツネ型の狭義のイヌ類、すなわちイヌ亜科に含まれる動物たちが中心である。

この狭義のイヌ類もさらに分化し、今から100～300万年むかしの第四紀初頭にあたるヴィラフランカ期（洪積世前期）には、ジャッカルやオオカミの祖先型、タヌキの祖先型、アカギツネとホッキョクギツネの共通の祖先型や、現生のものとほとんど違わないコサックギツネ *Vulpes corsac* が出現した。



イヌ科の系統発生の大要　原案　今泉吉典

A　プソイドキノディクチス
B　ダポエノドン　C　オステオボルス

――カラーページ注――

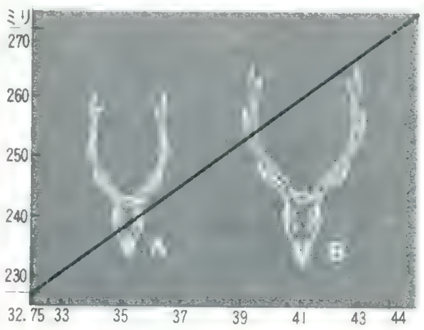
〔注1〕 **ベルグマンの法則**　「恒温動物では、同じ種に属する個体の大きさが気温の低い地方のものほど大きい」という法則で、鳥類や哺乳類の大多数の種に当てはまる。（本誌29号〔注1〕参照）

日本のシカ、モグラ、イノシシなどにもこの法則が確かめられている。すなわち、日本のシカやモグラでは、その局地的な個体群のからだの大きさ（頭骨の長さにはっきり見られる）と気温のあいだには、みごとな直線のグラフで表わされる相関関係がある。たとえば、本州・四国・九州に分布するニホンジカ *Cervus nippon* の頭骨基底全長（頭骨の底面における最大長）の平均値（ミリ）は、下の式によって求められる。気温指数とは産地の北緯度数に、標高100メートルにつき緯度0.40と換算して加えた数である。

頭骨基底全長＝110.84＋(3.64×気温指数)

この関係を図示したのが右の図である。体長、肩高、角の長さなども、頭骨と同様に、気温指数に応じて顕著に変化する。

ニホンジカ（雄）の頭骨基底全長（平均値）と気温指数との関係



縦軸は頭骨基底全長　横軸は気温指数

この図表を作成するために調べたニホンジカ（雄）のうち（屋久島産は含んでいない），頭骨の長さが最小のもの（A――長崎県長崎付近産）と最大のもの（B――長野県八ヶ岳産）のデータは次のとおり

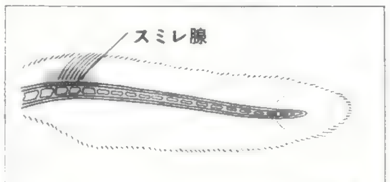
産　地	北緯	標高	気温指数	頭骨基底全長
	度	m		mm
長崎県長崎付近	32.65	25	32.75	227.0
長野県八ヶ岳	36.0	2000	44.00	272.0

〔注2〕 **スミレ腺**　イヌ科動物の尾の上面基部にある尾背腺（びはいせん）の異名で、アカギツネではとくによく発達している。その分泌物がスミレにいくらか似たかおりをもつのでこの名がある。

尾背腺は毛の基部に開く皮脂腺が大きくなり、集合したもので、分泌物が蠟状であるところなど、まつ毛の基部にあるマイボーム氏腺によく似ている。

腺の表面は他の部分と同じく長い毛でおおわれているが、その部分の毛は他の毛と違って太くて先が黒いため、イヌ科動物に特有の黒斑をなしている。また、その毛の基部には蠟状の分泌物が付着している。

スミレ腺の位置



え　小河原芳美

〔注3〕 **アカギツネの寄生虫と伝染病**　他の動物と同じように、アカギツネにも多くの寄生虫が寄生し、伝染病があるが、それらのうち、衛生上無視できないのは、エキノコックス *Echinococcus* という条虫と狂犬病である。

エキノコックスはキツネをはじめ、オオカミ、イヌ、ネコなどの食肉類の小腸に寄生する長さ2～8ミリのごく小さな条虫であるが、これらの動物のふんとともに出た卵が飲料水などに混ざって人間の体内にはいると、10～20年もたったのちに悪性腫瘍（しゅよう）に似た重い症状を起こす。

エキノコックスは世界各地に見られるが、幸い日本にはなかった。しかし、戦前、養狐（ようこ）業が流行したころ、コマンドルスキー諸島や北千島から輸入したアカギツネといっしょに青森県や北海道の礼文島にはいり、恐慌を引きおこした。

狂犬病は狂犬病ビールスをもった動物にかまれて起こる急性伝染病で、死亡率100パーセントの恐ろしい病気である。

洪積世中期になるとホッキョクギツネが現われ，洪積世後期の寒冷なウルム氷期には北半球に広く分布したが，沖積世にはいると極地に後退した。そして，沖積世中期に現われた，イヌ科の動物のなかの両極端ともいうべきオオカミとアカギツネが繁栄することになった。オオカミとアカギツネはユーラシア起源であるが，約15万年前のリス氷期に，北アメリカに進出したもようである。■

日本のアカギツネ

アカギツネは分布が広いだけあって，地理的な変異が著しく，ユーラシアに生息するものだけでも20亜種がある。

しかし，その亜種の多くは怪しげなもので，信じにくいことだが，アカギツネの分類は現在でもまったく便宜的なものにすぎない。このことは日本に生息するアカギツネにも当てはまる。

キタキツネとホンドギツネ

日本のアカギツネは，現在２亜種に分類されている。１つは北海道に生息するキタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* と，本州，四国，九州に分布するホンドギツネ *Vulpes vulpes japonica* である。

キタキツネはホンドギツネよりも大きく，頭胴長は76センチ前後，後足長は約16.8センチほどある。からだの上面は美しい橙赤色で，前後肢の前面には，はっきりした黒斑がある。

ホンドギツネは頭胴長70センチ前後，後足長14.5センチほどで，からだの上面に白い差し毛が多く，四肢の各前面にある黒斑は小さくて，とくに後肢ではほとんど痕跡的（こんせき）といっていい。

キタキツネとホンドギツネの違いはかなり顕著で，これらを区別することには問題がない。かえって，ホンドギツネとキタキツネをも含めたほかのアカギツネとの違いは，たんなる亜種の違いといったレベルを越えているとさえ思われる。

ホンドギツネは原始的な種か

ホンドギツネは，大陸や北海道のアカギツネと違って，頭骨だけをとってみても，

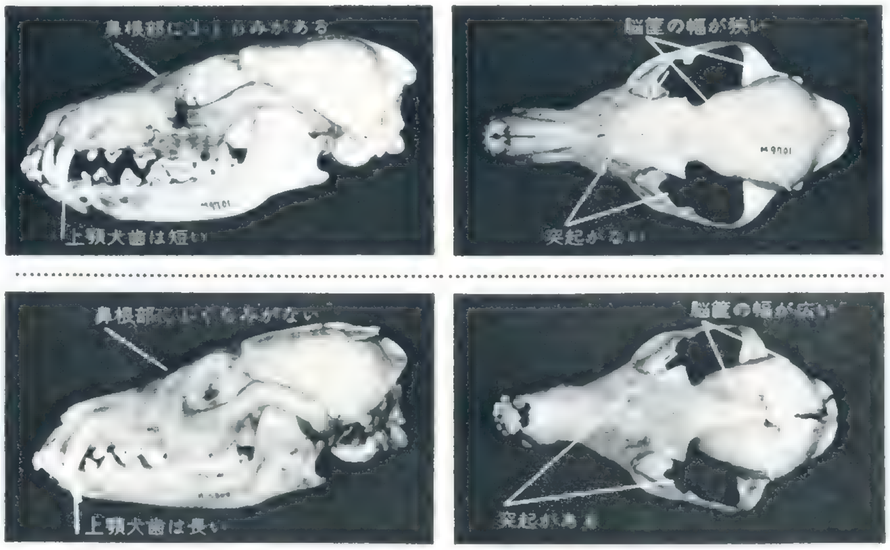
●上あごの犬歯が短い。
●鼻根部（びこんぶ）がタヌキのようにふくらんでいる。
●口蓋（こうがい），眼窩（がんか）と眼窩の間，脳筐（のうきょう＝脳がはいる部分）は，いずれも幅が狭い。
●頬弓（きょうきゅう）の下縁には，アカギツネに特有の突起がない。

などの顕著な違いがあげられる。

しかし，なんといっても問題なのは，ホンドギツネには乳頭が８個もあるらしいということである。アカギツネの乳頭は６個で，この数はキツネ属全体に共通だと考えられているから，キツネ属のなかで，ホンドギツネだけが例外ということになるのである。

一般に乳頭の数は，進化とともに減少する傾向があるから，ホンドギツネはアカギツネよりも原始的な，別の種ではないだろうか。前にあげた頭骨の違いも，特殊化の度が低いことのあらわれで，より原始的な状態にあると解するのが妥当なようだ。ホンドギツネが独立種かどうかは別としても，このようなところに，いまだに問題が残されていることだけは明らかである。

ホンドギツネ(上)とキタキツネ(下)の頭骨　　撮影　今泉忠明



未完成な哺乳類の分類

先に，ホンドギツネの乳頭数は８個らしいと述べたが，「らしい」と書かねばならぬほど，わたしどもが調べ得た標本は数少ないのである。しかし，このような点では，欧米のキツネ類も決してじゅうぶんに調べつくされたわけではない。

これまでに述べてきた，アカギツネとホンドギツネとの違いのほかにも，アカギツネの一亜種で，サハリンにも分布するとされるキタキツネと，アジア大陸東部にいるアカギツネとがほんとうに違うものなのかどうかもわかっていない。

また，現に問題となっているホンドギツネの分類についても，その歴史を振りかえってみると，いかに安易に分類が行なわれていたかがわかる。ホンドギツネは，1868年に独立種として，つまりアカギツネとは別の種として記載された。当時は現在とは違い，種とは変異のないもの，郵便切手のように１枚の見本で代表できるものと考えられていたので，ヨーロッパのアカギツネと少しでも違うものは，片っ端から別種にされたのである。

後の研究者が，実際に調べもしないでホンドギツネをアカギツネの亜種に格下げしてしまったのも，当時の極端な細分主義の傾向を考えれば，あながち暴挙ともいえないわけである。しかし，逆に，このような安易な統合主義の非科学性は，いまや痛烈な警告を与えられているのかもしれない。

ともあれ，哺乳類の分類は，すっかり完成しているように一般に考えられているが，それは錯覚にすぎないのである。■

カラーページ注

人間をはじめ，イヌ，ネコ，スカンク，コウモリ，ウマなど多くの動物が感染するが，北アメリカで研究されたところでは，保菌者のおもなものはアメリカアカギツネである。

キツネの数が少ないときには，狂犬病は一部のキツネの集団にほとんど限られている。しかし，キツネの数がふえ，行動圏が重なりあってくると，狂犬病のキツネにかまれるキツネがふえ，流行しはじめる。狂犬病にかかったキツネは，人間，イヌ，オオカミなどさえも恐れなくなり，日中もうろつきまわって，出会ったものにかみつき病気をうつす。こうして大流行が起こり，多くの動物が絶滅にひんするほど減少してしまう。

〔注４〕　**フェネックギツネの仲間どうしの連絡**　人間に聞きとれる音の振動数は毎秒15～20000回で，それ以上の振動数の音波は超音波である。キツネ，イヌ，ネコなどは毎秒の振動数が最高60000～85000回くらいまでの音を聞くことができる。イヌにこっそり命令する目的の，人には聞こえない笛がヨーロッパではむかしから使われているほどであるから，イヌやキツネ類が超音波で合図をかわすことはじゅうぶん考えられる。

〔注５〕　**聴胞**（ちょうほう）　中耳と内耳をおおい保護する薄い骨の壁でできている包みで，中には空気がはいっている。

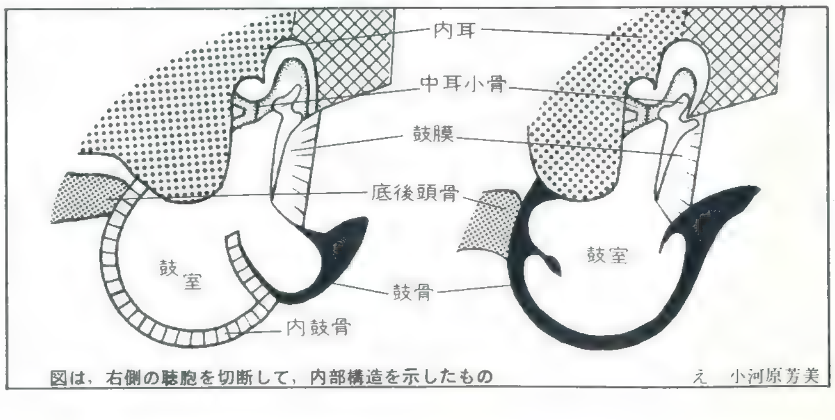
聴胞は哺乳類にだけあり，ふつう，鼓骨（ここつ）と内鼓骨からできている。鼓骨は爬虫類の下あごの一部を形成する角骨（かくこつ）が移動して，その役目を変えたものと考えられているが，内鼓骨は哺乳類になってからできた骨である。

ネコ科，ジャコウネコ科，ハイエナ科では，内鼓骨がふくらんだ聴胞の大部分を占め，鼓骨は鼓膜の周囲にしか見られない。しかし，イヌ科やクマ科，イタチ科，アライグマ科では，内鼓骨は退化してなくなり，鼓骨だけで聴胞が形成されている。このような違いは，２つのグループが別の系統に属する証拠とみなされ，系統分類上重視されている。

ところで聴胞は砂漠にすむ穴居性の小型哺乳類（フェネックギツネ，トビネズミ，カンガルーネズミなど）では著しく大きく，なかには頭骨の半ばを占めるようなものさえあるが，有蹄類のような大型哺乳類では小さい。

聴胞は空気中を伝わる音波を聞く際にはほとんど関係ないが，大地を伝わってくる振動を聞く際に大いに役だつものらしい。すなわち，大地を伝わってくる振動は前肢骨（ぜんしこつ）を通じて頭骨に達し（骨伝導），それが聴胞の共鳴によって拡大されて内耳のリンパ液に波を起こし，はっきりした音として感知されるのである。このため，大きな聴胞をもった砂漠の小型哺乳類は，穴の中に隠れているときでも敵の接近をいち早く知り，身を守る手段をとることができる。■　　（今泉吉典）

ネコ科動物とイヌ科動物の聴胞の構造　（左・ヒョウ，右・キツネ）



図は，右側の聴胞を切断して，内部構造を示したもの　　え　小河原芳美

ヒグマと２人のイノシシ 33

クマ，木に登る

畑 正憲



どんべえの後足の爪は１本欠けている。生爪をはがした後で，自分で食い折った次第はすでに報告した。それを読んだ親切なドクターが，

「われわれが応急手当するとき，鉗子を使うのに似ています」

と教えて下さった。

僕にも数多い経験がある。生かしたまま開腹手術をすることが多かったので，鉗子をふんだんに使って止血した。切れた血管を両側から押え，血の凝固を待ってほぼ完全に出血を防ぐのである。その経験がありながら，当時は全然思いもつかなかった。

それにしても，動物はなんと不思議な能力を身につけていることだろうか。僕は少年時代に読んだ猛獣物語を思い出した。耳をそがれ，肩の骨を砕かれ，それでも奇跡的に回復し，復讐の鬼と化していく動物の話を。

むろんフィクションであったろうが，僕は心をゆさぶられ，その余震は今でもある。そして，こういう現実にぶつかった時，ゆり戻してくるのだ。

それはともかく，欠けたどんべえの爪の方は，半月も経つとがっしりした根が芽生え，日に日に大きくなってきた。はじめは折れたままの感じで出てきて，摩滅するに従って形を整えていくと推測出来た。伸びてくる爪を見た時，僕は心底ほっとしたものだった。

写真やテレビでどんべえの爪を見た方の中には，

「爪を切って歯を抜いたらどうですか」

と，真剣に言って下さる方が多かった。

僕は，

「冗談でしょう」

と一笑に附したが，相手は本当にそうすすめているようだった。

爪を切ったり歯を抜いたりしたら，どんべえはヒグマではなくなる。歯無しの僕そっくりになり，１人と１頭でフガフガやっているのでは育てている甲斐がない。鋭い爪があるからこそ，その使い方を通して，仲間へのやさしさが学習させ得ると僕は考える。

さて僕は，オンコの特訓をオンブして頑張ったが，妻との賭けに負けてしまった。ヒグマの子は，そう簡単には木に登らぬのである。

登る際，後足も大変重要な役目を果たす。樹皮にひっかけ，突っ張って上への推進力を与える。どんべえの後足の爪はまだ完全ではなかったけれど，言訳にはならぬ。

木登りについて目安がついたのは，どんべえを鎖から放した時だった。

最初はうまくいった。呼べば僕についてくるし，適当に遊んだら自ら家の中に入った。

僕がわざと遠く離れていると不安になるらしく，立ち上がって捜したり，匂いを嗅いだ後で舐める行動を繰り返した。その後，家の中にとびこんだ。

この放し飼いと言える状態を，１日に２度か３度やった。と彼女は次第に大胆になり，遠出をするようになった。

こちらも大胆になり，目を離して浜で煙草を吸っているようになった。このどんべえの自由時間にはイヌは繋留して置いた。まさかの場合，というのは子グマが行方不明になった時，イヌがいると非常に役立つからである。

どんべえが遊び回るようすは，大体の気配でわかる。僕は海をみつめていても，かなしいかな後に気を配っていた。

それでも，どこにいるかわからなくなる場合がある。そんな時僕は，

――どうしているかな。

と，こっそり家の周りを忍び歩いた。

どんべえが木に登ったのはその瞬間だった。裏の草むらからとびだし，必死で枝にとりついた。暴れっこが無理矢理よじ登るように，手や足のバランスはとれていなかった。途中，口だけで枝にぶら下がったりした。

風に吹かれてぶうらりぶらり――。

遠くから見ている分にはこっけいである。けれどもどんべえとしてはそれどころではない。目の上側に相当大きな白い半月形。文字通り目をむいているのだ。その表情が僕にはたまらなくかわいい。

僕は笑って，

「どん，どん，下りてこい」

こいというアクセントが，いつの間にか北海道流になっている。「こ」を大きく，「い」を軽く発音して。

木の上からどんべえは，まじまじと僕を見た。ためつすがめつ。メガネをかけぬ近眼の女性のまなざし。

クマは近眼だという解説をどこかで読んだ記憶はあった。けれど，動物の視力については，納得出来ぬ点がある。人間の鋭い識別能力は，多分に文明によって鍛えられている。それを基準にして動物の眼力を論じている場合が多い。

船に乗っているとわかるが，漁師は海上にあるごく小さな異物でも見逃さない。その鋭さは，人間の常識をはるかに越えていると思う。

動物だってそうだ。山という特殊環境下に於ては，クマの目が漁師的な働きをするかもしれぬ。

識別能力なら，どんべえのものは極端に低いと言える。黙って風下から近づいたらひどくおびえる。

広い浜の場合は，発見するのは早い。伸び上がっていち早く見つけ，警戒体制に入る。

形の分析もかなりのものである。異様な風体をしたり，大きな荷物を持っていたりすると落ち着かなくなる。合羽，傘，オーバー，胴長――そのほとんどがいけない。つまりどんべえについては，次のようなことが言えるのではあるまいか。

１．動くものを発見するのが早い。

１．一応シルエットで判断する。

むろんこれは仮説である。確かめるためには，クマを何頭も馴らして，学習等の手法で定量しなければならぬ。

クマは人間のように群れ，わずかな違いで他人を分別したりする必要がない。だから実際上は，それほど目の鋭さを要求されないわけだ。

その代わり，音に対しては細かい所まで聞きわけている気がしてならぬ。たとえ奇妙な姿をしていても，

「どんべえ，どんべえ」

と遠くから呼びかけさえすれば，暴走を始めたりしないからだ。ひいき目ではなしに，僕と他の人では違う。

しかしこれも科学的な批判には耐えない。イントネーションなどの余分なものを除くために，本当は単純な音を使って実験しなければならぬ。動物のこういう能力をひとつ論ずるのにも，学問としてなら大変な労力と時間がかかるのである。が，僕にはその閑もないし，余力もない。どんべえと名づけた子グマがどうであったか，こうして書き綴ってゆくしかない。

長くなったけれど，というわけで，どんべえが急に木に登ったのは，僕の不意の出現に驚いたせいだと判断した方がよさそうだ。

その観察はまんまと図に当たり，外で急に音をたてて貰い，オンコの柱によじ登らせることに成功したのだった。これは幾度も実験し，ほぼ確実だと僕たちは判断した。

木だけではなく，びっくりすると山の上へ逃げようとするのには弱った。見境がなく，上へ上へと引っ張られるのには困りものだった。

そこで，コンクール１位の写真が読めてくる。人の接近に驚愕したクマが，木の上へと逃走したものと考えられないだろうか。

漁師が撃ち落としたものもそうだ。クマはおよそ本能的に樹上へ逃げたのではなかろうか。

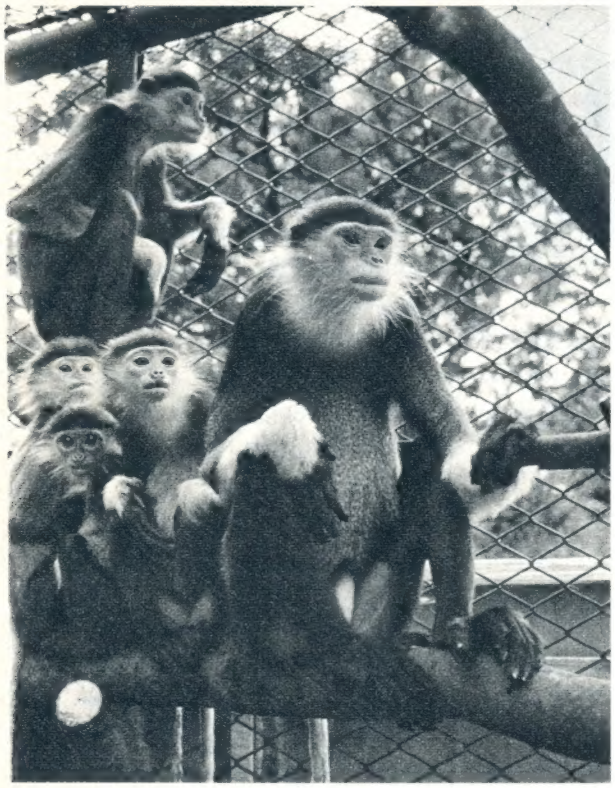
一方，山でヒグマと出遇い，木に登って命をまっとうしたものもいる。つまりヒグマは，ある年齢に達すると体重が増え過ぎ，木には登れないと考えた方がよさそうだ。

僕はそこから思考を飛躍させる。山で単独行を好むヒグマとヒグマが出遇った時，もし片方が幼体だったとしたら，木の上に逃げるという手がある。そこでほとぼりをさますとすれば，多摩のツキノワグマ同様である。

もし自然でこういう例が発見されたら実に楽しい。いや，僕にとっては想像するだけでも。■



びっくりして必死に木の枝にとびついたときから，ようやく木登りを覚え始めた



飼育自慢

2

ドウクラングール

野毛山動物園（横浜）

ことしの5月、横浜の動物輸入業者より「ドウクラングールを入手したので見てほしい」という電話があった。「まさか」と思ったが、一応見にいったところ、まさに本物だったのでビックリ。まだ写真だけしか見たことがなく、実物を見れるとは思ってもいなかっただけに、思わず「これだ！」と叫んだほどだった。

14頭が狭いおりの中に入れられ、不安げにわれわれの顔をのぞきこんでいるのを見ると、これはなんとかしてやらなければ、と思うのが人情である。さっそく動物園に帰り皆と相談をして、とりあえず8頭を預かり飼育することにした。

この種は草食いザルの仲間で、ベトナムのジャングルの高い樹上で生活をする。だが、飼育は困難とされているやっかいなサルなので、まず、食糧となる木の葉捜しから始め、シイ、アカシア、ヤナギなど数種類を並べて、食べぐあいを見ることになった。その結果、ヤナギをいちばんよく食べることがわかり、動物園内のヤナギが丸坊主になるほど刈り取って与えたが、なぜか1頭、また1頭と死んでいくのである。大学で解剖してもただ衰弱というだけで、なんの病気かは判明せず、ストレスによる死としか判定できなかった。

ある日、雨が降り気温も低くなったので、寝小屋に稲藁を入れておいたところ、盛んに稲を食べているのを発見したので、さっそく生米を与えたところ、木の葉よりもよく食べ、だんだん元気になっていった。残念なことに、それに気づいたのは、すでに5頭ものサルを死なせたあとであった。

現在、残ったサルたちがおりの中を元気にとびまわっているが、外国の動物園でもほかに15頭いるだけで、世界的な珍種といえる。■　（獣医師・堀　浩）

原稿募集

本誌編集部では、次のような原稿、写真を募集しています。

仲間のひろば――本誌への要望、動物界への意見、主張。また、自然保護に関する各地の現況、対策など。

ペット相談室――ペットの飼育法、病気、購入などに関する質問。

読者の研究――動物の採集、分布、飼育観察などの研究報告。

動物写真――あなたが撮影した自慢のもの、または秘蔵の動物写真。

動物ニュース――学会、同好会、動物施設、保護、飼育などに関する珍しいニュース。

原稿の枚数は、いずれも原則として400字詰原稿用紙2枚以内（編集部で短くすることもあります）。

原稿には必ず住所、氏名、年齢、職業、電話番号をお書きください。また、できるだけ写真を添付してください。

採用分には薄謝、または記念品を進呈いたします。なお、お送りくださった原稿、写真はいっさいお返しいたしません（秘蔵の写真など例外あり）。

採否のお問い合わせにもお答えいたしかねますのでご了承ください。

送り先

東京都千代田区有楽町2の3（〒100）
朝日新聞東京本社
「世界動物百科編集部」
『私たちの仲間』係



〈問〉　ゴールデンハムスターを飼いました。水のやり方、えさの時間、雌雄の区別のしかたなど、わからないことばかりです。毛も立っていて元気がなく、寝てばかりいます。どうしたらよいのでしょうか。（東京・太田由季・11歳・小学生）

〈答〉

♣ 水のこと

ゴールデンハムスターは、砂漠みたいなところにすんでいる動物です。野生での暮らしはよく知られていませんが、あまり水は飲まないものだと考えられています。飼っているときも、直接、水を飲ませる必要はありません。ただ、水分の多い野菜やくだものを喜んで食べますから、水のかわりにキャベツやジャガイモ、くだものなどを与えてください。量はそんなに多くはいりません。家族の食卓から、分けてもらったぐらいでじゅうぶんです。

♣ えさの時間について

えさは、朝やってもあまり食べません。夕方に与えましょう。運動をさせたあと、小屋にしまうときに、えさを与えておくのがいちばんよいでしょう。野菜やくだものなどは、ときどき手で与えて、食べてしまうのを確認したほうがよいのです。うっかりすると、巣箱の中にためこんで、それが腐っていやなにおいの原因になることがあります。ヒマワリの種やそのほかの穀物のえさは、巣箱の中にためこませてもよいでしょう。ただ、あまりためこんで、寝る場所もなくなってしまうことがありますから、ときどき巣箱の中を調べてください。

♣ 運動について

この動物は寝ていることが多いので、ふだんは小さな小屋でもだいじょうぶです。ただ、活動時間になると小屋をかじったり、出し入れ口の戸をガタガタゆすったりします。なれているハムスターなら、そのようなときに、しめきった部屋の中で、1時間ほど放して遊ばせるのもよい方法です。

しばらくは部屋のすみを走りまわったり、カーテンによじ登ったりしていますが、そのうち、えさや巣になる材料などを口にほおばって、自分の入れ物に運びこんだりします。そうしたら、もとどおり入れ物にしまっておけばよいでしょう。ただし、ハムスターは歯のじょうぶな動物ですから、ざぶとんやら家具をかじられないように、気をつけましょう。

また、ハムスターは脱走の名手ですから、小屋はしっかりしめ、中からあけられないことを確かめておきましょう。夜中に逃げられると、それっきり見つからなくなってしまうことがあります。

♣ 雌雄の区別について

ゴールデンハムスターは、雌のほうが雄よりもからだが少し大きいのと、雄はからだの割りに睾丸（こうがん）がとても大きくなるので、すぐに区別がつきます。睾丸は、ときにはひどくはれたように大きくなって、地面を引きずって歩くようになり、病気とまちがえられることがあるくらいです。

雄はおとなしいのですが、雌は気が強く、よくけんかをしたり、雄をいじめたりするので、別々に飼ったほうがよいでしょう。とくに、子どもをもった雌は気が荒くなり、ふだんなれている人の手でも、ひどくかみつくこともありますから気をつけてください。

♣ 睡眠について

ゴールデンハムスターは、夜行性の動物です。夕方4,5時ごろから起きだして、夜中の11～12時ごろまで活動します。そのほかのときは、からだを丸めて寝ていますし、起こしてもねぼけて元気がありません。また、ひどく暑いときや寒いときも、寝てばかりいるようになりますから、夏は涼しい場所、冬は少し暖かい場所においてやりましょう。■

（多摩動物公園飼育係長）

裏表紙説明

クロハラアジサシ *Chlidonias hybrida*
カモメ科に属する渡り鳥で、夏になると、南・北アメリカ大陸を除く世界じゅうの各地で営巣する。日本にも、秋の9,10月ごろ、中国大陸で夏を過ごしたものが飛んでくることがある。

カモメよりも小型で、夏は頭部や腹部が黒いが、冬になると白っぽくなる。足とくちばしは鮮明な赤で、これは四季を通じて変わらない。

アジサシの類は、ふつう地上や樹上に巣をつくるが、写真のクロハラアジサシは水草の間に浮巣をつくって卵をかえしている。卵がかえるのは、ヨーロッパでは7,8月ごろで18～20日間ほどかかる。

えさは、魚、昆虫（こんちゅう），カエル、イモリなどで、抱卵，育児は雌雄共同で行なうが，卵を抱くのは雌のほうが多い。

カモメのように水面をかすめて飛びながら魚をとるが，水に浮かぶのは不得手のようだ。■　Ph.A.Fatras

▶おことわり　本号『夜空の動物たち』は休載します。

狐面の木型



雌狐面
20.5センチ
(高さ)



宝珠雄狐面　21センチ(高さ)

さきに熊乗り金太郎で紹介した三春人形は，日本の張子細工のもっとも美しいもののひとつであるが，今度は狐の面を作る木型で，もう一度登場してもらおう。三春の張子面は，主に夜祭のときに子供の玩具として売られた。種類は多く，獅子，七福神，翁，般若，おかめ，ひょっとこ，猿，鍾馗，力士，金時，武者，鬼，天狗，烏天狗など，いろいろとあり，どれも独特の表現をもっている。狐の面もそのひとつで，雄狐，雌狐，それに変わり型として，ここに掲げた宝珠雄狐がある。完成品の面もよいが，紙を貼りつける土台となる木型が，またなかなか見応えのある彫刻なのだ。ことに古い木型で，使いずれのしたものは，言葉につくせぬ深い味わいをにじみ出させている。

木型の材料は，三春地方で俗にドロボーの木と呼ばれるヤマヤナギで，薪にされる雑木である。軟らかく，木質が細やかで，紙のはがれがよく，手に入りやすいことが，材料として適していたのであろう。この木を，切れ味のよい刃物で鮮かに彫りあげて木型を作った工人たちの腕前は，まことにみごとであった。それは精緻で巧みなみごとさではなく，いきいきとした民衆の生活のなかから自然に生まれてきた，素朴で豊かな情感のこもったみごとさである。この狐面の木型にただよう一種の凄味も，信心の対象にもなった狐という動物と，民衆の心とのつながりを，よくあらわし得ていると言ってよかろう。■　（水尾比呂志）

世界動物百科　通巻35号　昭和46年11月7日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人 大田信男　発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



クロハラアジサシ　説明 30ページ

雑誌 0631-11／7